
サヨナラノート

かるびーえーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヨナラノート

【Nコード】

N3038R

【作者名】

かるびーえーる

【あらすじ】

言葉を紡ぐことができない先天性の病を抱える少女、小向向日葵^{こむかいひまわり}。彼女が父と共に新天地のヒマワリの咲く田舎町に引っ越し、かけがえのない友や大人達と触れ合うことで彼女は何を得て、何を失うのだろうか。決して幸せを見つけない物語などではない。これは彼女が現実と向き合い、そして受け入れ、それでも現実の世界で生きる物語。次回更新予定日↓12/3

向日葵

ひまわり
「向日葵」

雲一つないお天道様の下、私は父のしゃがれた声に呼ばれて振り向いた。

私の振り向いた視線の先には、両手で何株ものヒマワリを抱えて子供の様な人懐っこい笑みを浮かべた初老の父がいた。

「お前知っているか？ヒマワリの種は食えるんだぞ？　これが意外といけてなー……ほらっ、試しに食ってみるか？　ヒマワリの種は栄養豊富で……えっと、確か鉄分とか鉄分とか鉄分とか、とにかく凛々しい男になるのに必須な食べ物だ。ははっ、でもまあ向日葵は女の子ちゃんだからキョーミ無いか」

父は摘み取ったヒマワリを地面に置き、懷から出したヒマワリの種を私に差し出してくる。

私はただただ黙って種を受け取り、呆然と摘み取られたヒマワリと手の中にある数粒の種を交互に見やる。

ヒマワリが可哀想だよ。

その一言を私の口から直接、父へ伝えたくても伝えられない。だって、私は不完全な娘だから。

父のしゃがれた声を聞き受け取るこの耳と、田舎の美味しい空気を肌と鼻で感じ取り、ヒマワリ畑と父を見る目。

人間にとって、殆どの機能を神様から授かっている私はこれ以上贅沢は言ってはいけないのかな。

もっとも、その贅沢も言えないのだけれど。

「……………」
「おいおい、向日葵。別にそんな真剣な顔して種と睨みっこしないでいいんだぞ？ 嫌だったら、無理して食わなくていいし……ただ、父さんはビールのあてに食ったら意外にご飯がススム君でなあ……」

父は白髪のをりをりと掻き、照れ笑いを私に見せる。
私は父の見せるその態度が私に気を遣っているということは既にお見通しであった。

父は何かを誤魔化すとき、照れ笑いを浮かべる癖がある。
父と母が私の親権の問題で喧嘩して一時期、別居していた時のこと。幼少のころの私は内心ハラハラしながら、二人を交互に見やっていたのだが、そんな恐らくは過度なストレスを抱えていた頃の父は私に向かって、こう言ったのだ。

『母さんなあ……生理で荒れてんだよなあ。あー、おつかねえカミさんだあ。向日葵、だから母さんに近づくんじゃあないぜ？』

につと何故か照れ笑いを浮かべながら幼少の私に母に近づくな、と暗に警告したのだ。

当時の頃の私は頭に謎マークを浮かべながらも、云々と父の言うことを聞いていたのだが、今からして思えばあれはああなるほどそういうことか……と理解できるのだ。

でも、理解はできても納得はできない。
年端もいかない鳥が自分の翼で親の力を頼らず巣立っていくように、私は父のソレが疎ましく思えた。
私は私で、父は父だ。

父が言葉の力で母を口喧嘩で言い負かすことができても、私には無理だ、と言われているようなのだ。

実際にそれは嘘ではないし、私は機嫌の悪い母を抑える自信はなかった。

けれど、それを認めたくなかった。

私は言葉がなくても、こうして生きているのだ。

不完全な私でも、不完全な私をひっくり返して向日葵という私がここにいるのだ。

実のところ、私は苗字はともかく自分の『向日葵』という名前が嫌いだ。

ヒマワリの花言葉は『私の目はあなただけを見つめる』。

他にも『いつわりの富』とか『にせ金貨』とかネガティブな花言葉もあるけれど。

そんなことよりも私はその『私の目はあなただけを見つめる』という花言葉が大大大……いくら大がつくか分からないほど嫌いなのだ。理由は単純明快。私とはまったく無縁の花言葉だからだ。

どういう意味ってそれは……。

と、私が脳内で自分の考えに浸っていると、いつの間にか父がじっと、怪訝な表情で私を見つめている。え……何、何なの……？ 意地の悪い子供が丹念込めて作った泥団子を好きな女の子に食べてもらうのを今か今かと待っていますよみたいな表情は……。

「えー……そつ、そんな嫌そうな顔すんなって！ はは、別に毒じやねえし……よしつ、だったら父さんが見本としてボリボリこいつの種を貪るように食ってやろうじゃあないかつ！ よーし、見てろ

う……」

何故かいつの間にか私が食べないといけない展開になってる……。さっきの父のセリフは何だったのだろうか。というか、父の嬉々とした表情でヒマワリの種を貪るように食べる姿なんて見たくもないのだけれど。というか、その種って本当にそのまま食べられるの……？何か大変ばっちいような気が……。私は呆然と、父の姿を見つめていた。

「よし、いくぞう……バクツガリツボリツ、んがっ……むっ、か、固いなあこりゃあ……案外。ボリツボリツ」

本当にリスみたいに貪るように食べ始めた……。

それに案外……？この人は本当にヒマワリの種を食べた事があるのだろうか？

私は何とも残念な人にしか見えない父を視界から外し、遠くに見える田舎町の方に向いた。

山々に囲まれた小さな家屋が点々と疎らで申し訳ない程度に存在している。

あの町が私と父の新しく住む町……。

今まで車の排気ガスやカルキ臭の強い水に囲まれた生活を送っていたから新鮮だなあ。

けれど、こないかにも大気汚染を招きそうな軽トラが綺麗な田舎町の、しかもヒマワリ畑に止まってもいいのだろうか……。

父は『どうだあ、俺の自慢のぼるしえだぞう』とか言いながら、引っ越し前に私に胸を張って自慢していたけれど。

何だ、この体たらくは。私はこんな色んな意味で情けない父を持つ

て、本当に恥ずかしいです。

何だか甲斐性無しの父に無性に腹が立って私は射殺するように父を睨みつけた。

「……ん？ボリボリッどうひたあ？」

まだ口をもごもごと動かしている父は私の死線、もとい視線に気づいていないようであった。

私の父はどうやらアホウのようである。私はそんな父を見て、諦めた。

こんな時に言葉が言えたら。こんな時にうまく言葉が言えたら。

「おうおうおうおう……しかあし、本当にここいらはヒマワリの多いこと多いこと！俺の娘がいつぱいにその辺に咲いてらあ。いつかどこその馬鹿野郎に種付けされんだろうなあ、いてついててっ！ば、馬鹿！向日葵、父さんのいたいけな腰を蹴るなよう！じよ、冗談だっ冗談！」

本当に誰かどうにかしてこの下品な馬鹿おやぢ。

言葉の暴力が駆使できないのなら、普通の暴力に走るしかないのは自明の理である。

私は下品なおやぢを無視して、田舎へ通じる道を歩き始めた。

「お、おおい！こら、向日葵い！こ、こんな可愛い父さんを置いていくなよう！」

私は父の悲痛な叫びを背中を感じ取りながら、父から見えない位置でヒマワリの種を口に放り込んだ。

ヒマワリの種はちょっと固くてほろ苦い味がした。

紫陽花

ヒマワリ畑を抜けると、開けた場所に点在する村々が見える。

車窓から見える景色は今まで都市ガスに揉みに揉まれた私にとってどれもこれも新鮮で、私は畑で精を出しているおぢさんやおばさんを見やっていた。……ふうん、一次産業ってこんな感じなのね。イメージ的には実際とドンピシャなのだけど、自分の目で眺めるとテレビで見るのとは新鮮味が一味も二味も違うことが実感できた。

「ははっ、向日葵。そんなに気になるのならその辺のおぢさん達に向かって手を振ってみたらどうだ？」

ハンドルを握る父は陽気に笑いながら、そう言う。

しまった……父には悟られないように平静を装っていたのに。何故そんなことをするの、って？だって……そんなのばれたら引越して舞い上がっている子供みたいに思われたら恥ずかしいじゃない。

……ふん、それにそんな純情少女みたいなことできるわけないじゃない。自分で言うのもなんだが、私は人に向かって笑顔という表情を作れない。無理して、笑顔を作っても何だかぎこちなく……そして微妙な間の後、気まずい空気を醸し出すのが私の大の得意だ。……何の自慢にもならないのだけだ。

と、思ったもののこのままやらないのも何だか父に負けたような気がして、そしてフロントミラーに映った父の微かなほくそ笑みが私の中のムカつき度合を助長していて、何だか乗せられているような気がしないでもないけれど、私は父の挑発に乗ることにした。

車窓へ顔を出すと、麦わら帽を被ったピンクのタンクトップのおぢさんが畑仕事の小休止なのか、ちょうどタオルで汗を拭い軽トラの

方に向かって立っているのが確認できた。よし、ターゲットはあのタンクトップおぢさんがいいわね。えーっと……笑顔って、とりあえず口元を歪ませて……目つきもこう細目で……私はサイドミラーで自分の表情を確認し……よし、おけっ！私は自信を持って再びタンクトップおぢさんの方に視線を向けた。

目が合った。

タンクトップおぢさんは何ともいえない苦笑い。
言われなくても分かる。

その苦笑いの中には『無理すんなべ嬢ちゃん』の台詞が込められていた。

そして私は私で、おぢさんの反応を見た後、何だか分からないが自然と顔に熱を感じた。

「ぷっ……ぷくくっ……ふぶっ、大変不自然ですな向日葵さん」

父は抑えきれないのか、左手で口を押えて必死に堪えている。

……何が可笑しい、馬鹿おやぢ。不自然ですなっそれはどういう意味だ馬鹿野郎。

私は言葉に出せないイラつきを表情に込めて、父を横目で睨んだ。
私の視線もとい死線に気付いた父は一息、ごほんと咳をして口を開いた。

「……いやあ、すまんすまん。いや、何……向日葵って何にでも一生懸命だな、って思ってたな」

……ふん。

一生懸命で何が悪いの？私が誰かに迷惑かけた？何時、何処で、地球が何回まわった時？

何だか一連の父の態度に無性に気分が悪くなった私は車窓に顔を出

して、父の顔を見ないようにした。つーん、別に拗ねているわけじゃないのよ。

「……はは、そんな風船みたいに頬を膨らまして…… 本当に向日葵はまだまだ子供だなあ。本当に…… 本当にお前は誰に似たんだろうなあ……」

……。

父の軽トラ内での最後の小さな寂しげな呟きは軽トラのエンジン音に掻き消されて、私の耳には届かなかった。それ以降は目的地に着くまで父は言葉を発さなかった。私は私で、軽トラの揺れに何だか揺り籠の中にいるような心地よさを感じてそのまま瞼を閉じ、しばしの眠りについた。

私の中の日本の家屋のイメージは赤色ないしは青色の瓦が屋根に敷き詰められていて、ついでにしょんぼり寂しげな佇まいをしているいわゆる一戸建てであった。ふうん、で…… 田舎と言えばその真逆の恐ろしく廃れていて、えっ、何、本当にここに人が住んでいるの?? 落ち武者の幽霊とか飼っているんじゃないの?? とかそんな連想を勝手にしていた時期があったの…… ていうか、目的地に着く直前まではそう思ってた。

でも、ごめんなさい。田舎のおぢさんおばさん皆々様。

私の勝手な妄想で田舎を汚してしまって、本当にごめんなさい。

私と父が今日から暮らす父方の祖母の家は恐ろしく普通で、恐ろしく周辺の山々とミスマッチなくごく普通の一戸建てであった。

「……ムッ？ どうした向日葵？ そんな微妙な顔して……ほら、今日からここでお世話になるばあちゃんに挨拶……ああ、会釈でもしとけよ？」

……げふんげふん。

別に漫画の中で見るようなレトロでボロボロな家を期待していたわけじゃあないのよ。ただ、その……ギャップが恐ろしく、そのイメージと違つて……あゝ、この話はここでおしまい。

軽トラを降りると、家の前には人当たりの良さそうな柔らかな笑みを浮かべて白い頭巾を被った一人の老人がいた。……この人が私の祖母なのね。……ふうん、私の父を女装させて、ちよつと老け顔にしたらこんな感じのおばさんになるわけね。つまりは、蛙の子は蛙つてやつね。ちよつと意味は違うかもしれないけれど。そして実のところ、私は親戚に会つのは今日が生まれて初めてのことだった。驚きでしょ？ 十八にして初めての体験。何か誤解されそうな言い回しになったような気がしなくてもいいけれど。

「やあやあ、お袋、しばらくぶりだね。身体の方は元気かい？」

「おやまあ、この子はおおきなつてえ……こんな暑い中、よくそんなボロボロの車でよさきたねえ……ほら、早く上がりんしゃい。あなたの好きな西瓜用意しとるねえ……おや、そこん、後ろにいる別嬪さんは……？」

軽トラから降りた父が祖母に挨拶すると、祖母は一言二言返した。そして、祖母は父の後ろにいた私の存在に気が付いたのか、私の顔を不思議そうな顔で見る。

私は私で、祖母に向かって軽く会釈した。自慢ではないが、私は結構人見知りするタイプだが、ソレを表に出さないようにするように

努力することができる。つまりは内心、ドキドキひやひや。

「ああ、この子はねお袋。俺の」

”えんこー”かいのう……」

……ぶふっ。

え、えん……？えっ、今、この人何て言ったの？

私の聞き間違いでなければ、大変よからぬワードが飛び出したような気が……。そして、父を見ると何故か少し頬を染め、タジタジしていた。

「あんたさあ、こないな小さい娘にまで手え出して、いつかバチが当たるよ、本当に」

「……いや、ちよつと待ってお袋。それ、すんごい誤解」

「誤魔化さんでええ武い……そらあ、そないな綺麗な長い黒髪と透き通るような白い肌、それでえ……華奢な体躯に控えめな乳と尻……あとはあ……この娘多分体毛薄いけえ、多分パイパンだなあ……うんうん、さすが俺の息子だあ」

「ちよっ……親父っ！？バカッ！！親父のバカバカバカン！！」

そして、新たにお爺さんが登場。

この人は私の祖父に当たる人なのかな。……まあそれはいいとしてえっ、何、いきなり初っ端からセクハラ全開なのこのおやぢ？

……むかむか。

ひ、人の身体的特徴を随分と平気でずばずばと……うふ、うふふふ……。

「ひ、向日葵……？お、怒るなよ……？この人達はどちらかというと馬鹿正直なだけなんだ……」

父は冷や汗たらたらで、どこか怯えた表情で私に向かって言う。
……ふふっ、全員まとめて肥溜めに放り込みたい気分だわ。しかしここで感情を露わにしたら、只の子供だ。こういう時こそ、大人の私は冷静にならないと……。私は失礼な態度を取る目の前の彼奴らへの感情をグツと抑え、平静を装い、それどころか父に満開の笑みを向けた。

「ははは……ははっ」

ふふっ、分かっているじゃない。

そう、これは警告よ。私が笑い出したら、爆発寸前であることを覚えおきなさい。

ふんっ、馬鹿おやぢめ。

「……で、武い。冗談は置いといてえ、その娘は誰けえ？」

そして、気を取り直して祖父が父に私の紹介を求めた。

ふうん、冗談。あのセクハラ発言も冗談だったんだ……ふうん。

「……ああ、この子の名前は向日葵……俺と百合子の間で生まれた正真正銘の俺の娘だよ、お袋親父」

”百合子”

十八年前。

都内の某産婦人科で私を産み落とした諸悪の根源。
交わる血、交わらない血、彼女は普遍的に、何ら一般的な家庭と変わらない形で確かに私を産み落とした私の母に当たる人物。

「「……………」」

父が祖母と祖父に向かってそう言うと、その場は一時の静寂に包まれた。

…… ああ、そして私の父はあの女をまだ名前で呼んでいたんだ。それは未練がある…… そういうこと。

まあ、別に良いけれど私には関係の無いことだし。私が口を挟むのも可笑しいことだし。

…… ただ単に、私はその名前を忘れていた、忘れようとしていた。なのに…… ふふ、まだ呼んでいたんだ…… 名前で。それも、苗字じゃなくて名前で。

「…… ああ、あの”悪女の娘”かい」

「お、お袋っ！！」

一時の静寂の後、最初に口を開いた人物は祖母。

その表情からは先程の気のよさそうなおばさんとは正反対の、相当の不快感と、憎悪と、色々な感情が込められたモノが私に向けられていた。それは言わば、業とでも呼べば良いのか。業という縛りで私を殺しかかってくるのだろうか。

”悪女の娘”

この言葉も今まで第三者から幾度となく聞いてきたことだしね。

ふふ、悪女の娘…… かあ。何だか響きからして、危険な香りを醸し出しているでしょう？

けれど、実際はそんなドラマに出てくるような素敵で危なげでドラマティックなお姉様ではない。…… ふふっ、先刻まで思い出さいないように、キーワードがふと脳内によぎっても気にも留めないようにするつもりだったのに。やっぱり、私はあの女と何処かで繋がっているのかしらね…… 血という忌々しい鎖で。

「武が久々に女子を連れてきたと思うたらそないな娘かい」

祖父も祖母同様、心底嫌悪感を露わにした。まるでそれはこの世の生を受けた者を見る眼ではない。さつさと、死んでこの世から塵屑残さず消えてしまえ。そんな見えない言葉が私の胸に突き刺さる。そう、やっぱり私は……。

「や、やめろよ親父まで！！ 確かにこの子はいつの娘だ……けどな、この子は何にも関係ないだろ！？」

祖父母の態度が気に入らなかったのか、珍しく父が感情的になって祖父母に喰いかかっている。

いつもの父なら笑って、その場を和ませるくらいの能天気なのに……。まあ、私を氣遣って感情を露わにしているのだろうけれど……。でも、その反応は正直クルルものがある。いつものように、何事もなかったように軽く鼻で笑って流してもらえれば傷口は塞がるのに。

……分かっている。

父が”そういうこと”を見過ごせる人ではないってことは。

でもそれがかえって重荷になって、私だけではない。自分にも降りかかって、沈んでいくってことを……。私の父は理解できているのだろうか。

いや、理解しながら分かって、そういう態度を取っているんだ。だからこそ……。私にとって、父は出来過ぎた父なのよ。それが、それが一番……。痛い。

「向日葵……。父さん、ちょっとばあちゃんとじいちゃんに話があ

るからこの辺で遊んでいてくれないか？ お前ここいらのことまだ何にもわかんないだろ？ 散歩してこいよ、けど夕方までには帰ってこいよ？ この辺、沢とか川とかあるから、じゃ、気を付けてな」

父は私をさっさとこの場から離したいのか、そう言っただけで私の両肩を掴んで、微かな笑みを見せる。……ああ、この無理やり作ったような笑み……父は私のために相当無理をしている。

私は内心気に入らなかったが、父の負担を考えて、こくりと軽く首を縦に振り、元来たヒマワリ畑に向かって歩を進めた。

業は業。

区別は誰にもできないのにね、馬鹿なおやぢ。

でも、それが私には自然と心地よくて、何ともいえない気分になるのだ。

……………。

ああ、つまり私はファザコンなんだ、ってこと。

ミーンミーンミーンミーン
ミーンミーンミーンミーン
ミーンミーンミーンミーン
ミーンミーンミーンミーン

………つっとおしいわね。

何でこんなクソ暑い時期にそんな煩く鳴けるのよ。短命のくせにいい気になるな蝉の馬鹿野郎。

夏になるとアスファルトで舗装された道路はお天道様にさらされて
とんでもなくうっとおしいほど熱気を放つ。私は胸元にキュートな
ヒマワリのアップリケが刺繍されている白のノースリーブのワンピースを身に纏っているけれど、それでも歩いてみるとだらだらと滝
のように汗が流れる。汗を流すこと自体は良いのだけれど、汗疹が
気になる……うう、帰って早くお風呂に入りたい。これもそれもあるうちの余計なことと言った馬鹿おやぢのせいだ、くそう。

少しの眩暈と疲れを覚えた私は道路の段差になった脇によつこらせ
つとバーコードおやぢのように腰をかけて小休止タイムに入った。
それから私は手持ちのクマさんハンドタオルで汗をぬぐい、水筒を
取り出して冷たいお茶を身体に流し込んだ。ふふ、夏のお天道様を
馬鹿にしちゃいけないのよ。備えあれば憂えなし、私を極寒の山
を全裸で登る馬鹿な女だと思ったら大間違いなのよ。えっ、それは
只の自殺志願者なんじゃあないかって？ いいじゃない、別にそんな
こと。

しかし、本当にこの田舎は何処も彼処もヒマワリだらけなのね……。
もしかして、主食がヒマワリの種だったりして。ディッシュのほと
んどがヒマワリ的な食べ物だったとしたら……ヒマワリと白ご飯が
九対一のとてもなくアンバランスなヒマワリ飯、ヒマワリの出汁
で作ったヒマワリ味噌汁、ヒマワリの花びらが入ったヒマワリ茶、
ヒマワリの花びらが練りこまれたヒマワリお豆腐……うっ、気持ち
悪くなってきた……。大体、目の前でヒマワリの種を貪られると何
だか自分が食べられているような気がしてあまり気分が良くない。
くそう、あのハゲおやぢめ（別に禿げていないけれど、気分的に）、
いつかしばいてやる。

「んっしょ……んっしょ……」

と、下らないことを考えていると私の目の前で可愛らしい小動物みたいな少女がせっせっせとヒマワリを摘んでいた。いつの間に……私はジッとその不思議少女を見つめた。うーん……何でそんな親の仇のようにヒマワリを摘んで……って、悪さはしちゃだめなのよ。私は少女に近づき、軽く頭を小突いた。自慢じゃあないけれど、私は見ず知らずでも悪いことをしているガキには注意できる大らかな心を持つ少女なのだ。

「あたっ……い、痛い。だ、誰……な、何をする」

少女はヒマワリを摘み取る手を止め、頭を上げた。

短髪の肩口で切り揃えられたショートカット、円らな瞳に幼さが残る顔、病的なほど白い肌……一つ一つのパーツが人形のように綺麗に整列している。そんな容姿をした少女が涙目で私を睨んでいるのだ。……ゾク、別に私は変態じゃないのよ。私も負けじと睨み返す。自慢じゃあないけれど、私は人一倍負けず嫌いなのだ。ふうん、この子セーラー服を着ているから、この村のどこかの学校に通っている子かしら。

「なっ……そんな怖い顔で睨んでも、な、何も出ないぞ……」

……怯えている、何この娘キャワイイ。

と、こんな不毛なことをしていても一向に話が進まない。私は手持ちの小さな手帳を取り出し、さらさらっと筆で書いて、一ページを千切り取り、目の前の少女に見せた。……えっ、喋れないなら手話ですればいいじゃない、って？通じると思うこの娘に？それに私はこうやって自分で手を動かして、字を書くのが好きなのよ。ふふん、私は別にものぐさ太郎じゃないのよ。

『あんだ、こんなところで何やってるの？』

「……？」

少女は私が千切り取ったノートを見せると不思議そうな表情で私とノートを交互に見やった。

あつ……そうか。いきなり見せても不審がるわよね。私はもう一度、筆を取り、ノートを千切り取って、少女に見せる。

『私、喋れないのよ。ふふん、さあお姉ちゃんにどんな悪さをしていたのか教えなさい』

「……お前は喋れないのか」

『……年上に向かってお前はないでしょ。私はお前っていう名前じゃなくてちゃんと”向日葵”っていう名前があるのよ』

「……お前はお前」

私に向かって人差し指をさすガキ。

ギョッ

私は失礼な態度を取る馬鹿ガキの頬を抓った。

ふふん、年上を敬わない子供にはこうやって適度に躾をしないと、大きくなったら生意気な大人になるのよ。ふふっ、何だか母親になったような気分だね。……うつつるさいっ、私はまだ十八の少女なのよ！！

「いたっ、ひたいっ！ やめろ！！ ひんぬー！！ パイパン！！
お前のかあちゃんですぞー！！」

パイッ……！？

くっ、げふんげふん……落ち着け私。こんな所で切れたら大人じゃないのよ……それは大人の振りした只の子供なのよ。私は口惜しく

も少女の頬から手を離した。柔らかかった……感触がまだ掌に残っているわ。

「はあはあ……痛い。お、お前……歳、いくつだ？」

『ふん、ちよつとエツチなゲームができる可憐な十八歳よ。向日葵お姉さまって呼べ』

「ふふつ……ふふつ！ 私はお前のいつこ上、十九だっつ！ お前こそ私を姉貴って呼べ馬鹿野郎……！」

少女はナイ胸を張り、腰に手をやって私に向かって自慢げな表情でそう言った。

なっ、何だと……！？こやつがじゅ、十九だとう……そんな、世界が真つ逆さまにひっくり返ってもあり得ない現象なのよ！く、く……敗北を悟った私は（何が敗北なのか自分でもさっぱり分からないけれど）四つん這いで地面に手をついた。

「はあはあ……分かれれば良いのだ。私は……私はお前よりずっと偉い。敬え、パイパン」
『って、調子に乗るな』

ビシッ

「あいたつ、人の頭をちよつぷするなあ！！ うう……」
『で？ 話を戻すけれど、あんたはこんなところで何をしているの？』

「……見て分らないのか。ヒマワリを摘み取ってる、以上」
『以上じゃないわよ。ヒマワリが可哀想だからやめなさい、めっ』
「ふん、お前は自分大好き人間なるしいちゃんか。この変態め」

ビシッビシッ

「いたいつ、だ、だからちよつぷするなあ……」

『ふん、誰がなるしいちゃんよ。私のことじゃないわよ、花のことよ』

「花つて……いいじゃないか。ここいらはこんなに狂ったようにヒマワリが咲いているじゃないか。一株や二株や三株や……百株やそこからごちゃごちゃ文句言うなバカ」

……おい、今物凄い勢いで数が飛んだわよ。
このガキ、そんなに今まで摘み取っていたのか。

「ふん、気分悪い。お家に帰る」

私の言葉で機嫌を悪くした少女は村の方へ歩いていく。
何よ、ていうかこの摘み取ったヒマワリを片付けていきなさいよ。
私は、仕方なく散らかったヒマワリを自分で片付けていく。

「あつ、お前にまだ名前を言ってなかった」

少女は何か思い出したかのようにくるっと私の方に向き、続けて口を開いた。

「私の名前は紫陽花^{あじさい}。よく覚えとけバカ」

少女はそう言い残し、駆け足で村の方へ消えて行った。

……。
友達がいないのかしらあの子。

秋桜

後悔先に立たず。

私の人生はそれの繰り返しで成り立っている。

それは別に人生の岐路に立たされた時、どちらに行こうかなとかそんな重要な場面でのことではない。ほら、例えば……そう、今私の目の前の寂れた駄菓子屋の寂しげにぼつんと一本だけある炭酸飲料、ソーダー君。

私は今、絶賛迷っている。このソーダー君を手取るか、取らないか。

私の思考回路には是が非でも水分補給を！の警鐘が鳴っていることは間違いない。

あの冷蔵庫でひんやりひやひやとした飲み物を是非このクソ暑い中、がぶ飲みしたいことも間違いない、それは間違いないのだ。拒む理由なんてサラサラないし、炭酸飲料に何か拒絶反応を示す特異的な病気も持ち合わせていないのよ。

しかし……現実的にはその欲求に走るリスクを伴うことは私自身に身に染みて分かっている。

チャラーン

「……………」

私はポケットから取り出したマネーとソーダー君を交互に見やる。ふっ、ふふ……さて、どうしようかしら。

今、私の所持金……にー、しー、ろー、はー……ギザ十、九枚也。そして、ひんやりソーダーはお会計、百円也。

……実しやかに足りないのよ。

足りないものを足りるように設定するには……そこに加えるしかないのは自明の理である。

だからってドロボーはいけないのよ、私は悪い人になるつもりはないのよ。

あくまで合法的に、そして穏やかに、慎ましく、愛おしく、百円にするのよ。

ザッと思いつく方法は三つある。

まず一つ目。

これは現実的でありながら、自分は一体何をしているんだろう？と嘆きたくなるほど地味で惨めになるかもだけれど……。もしかしたら、誰でも一回くらいはしたことあるかもしれない。……そう、拾い食いならぬ『拾い金』よ。道端に転がっている硬貨をすかさず自分のポケットに……。なによ。別にこれはドロボーではないのよ。これはいわゆる小市民的なボランティアなのよ。町綺麗活動に貢献するの。それだけではない。自販機の釣り口を手でがさごさがさ……。……すつごく惨めじゃないのよ。それにそんな都合よくそこらじゅうに硬貨が落ちているわけじゃない。やめやめ、やっぱりこれはボツなのよ。

じゃあ、二つ目。

これもある意味現実的だ、そしてやっぱり惨めなのかもしれない。父に『催促』するの。お金ちょうだい、って。その際、親馬鹿の父のことだから何に使うんだって尋ねてくると思うの。で、それに対して私は正直に、身振り手振りでソーダー君をこっきゅん飲むポーズを……。できるわけじゃない。いい年こいた女子高生がソーダー君？ププーってなるに決まってるじゃないの。じゃあ、色仕掛け

で誤魔化し……バカバカバカバカ。何でソーダー君一本で自分の父親に肌を晒さなくてはならないのか。馬鹿馬鹿しい……変なところでプライドの高い私には到底ありえない方法ね。これもボツ。

最後。

これは自分で言うのもなんだが、良い方法ではないかと思う。

それは平和的『交渉』よ。駄菓子屋のおばちゃんと交渉、という意味ではない。

交渉相手はあくまで子供だ。それも駄菓子屋に来ている利発的なガ……子供。

交渉というからには硬貨に見合うモノを用意しなければならない。しかし、今の私には即物的な物品は何一つ持っていない。そうなる、物品の代替えとなる成果が必要となってくる。

幸運的に私はその成果がまさに今、問われようとしている場面に瀕しているのよ。

「あー、ちくしょー……だめだ。全然、とれねえよ。あんなのとれっこねえよ……」

「ええー……メグ、あの盲目うさちゃんがほしいのに……コウくん
のバカバカバカバカッ」

ボロボロの駄菓子屋の脇にえらく近代的な機器もといUFOキャッチャーがあり、その前で苦戦苦闘しているツンツン頭の男の子とそれを見ているツインテの女の子。二人ともどう見ても小学低学年と言ったところかな。ふっふっふ、このお・ま・せちゃんズめ。お姉ちゃんが君たちみたいなの頃の時はそのような浮いた話はなかったのよ。……生憎、今もないけどねっ！

「し、しかたねえ……だろ？ あんな隅っこに埋もれてるブサめんのウサギのヌイグルミなんかとれっこないって。ほら、その一番

上にあるいかついブルドッグのヌイグルミにしとけって」

「やだやだやだっ、メグはあんな汚いヌイグルミより、あの盲目のさちゃんがいいのー！ コウくんのバカバカバカバカちびちびちびー！ りこんとどけかいてやるんだからあー！ びええええ……！」

うーん、修羅場ってるなあ……。

でも、こういう風景って子供に限らず大人のバカップルでもあるよね。ほら、彼女の方が彼氏にヌイグルミが取れるまでマナーを酷使させるっていう……見ていて可哀想だけど、男冥利ってとこなのかな。私は淑女なのでそのあたりはよく分からないのです。まあ、そんなことはどうでもよくてまさに今あの子達に人の手が必要なのは確かなの。ふふん、こう見えて私は都会のゲームはひと通りやってきた猛者^{ゲーム}なのよ。『ダークマター向日葵』とでも、呼んでもらっても構わないわ。ていうか、そう呼びなさい。そして、私は意気揚々とその男女の子に近寄っていく。

「う、うわっ！ な、なんだよお前……いきなり、割り込んでくんなよな！」

『ふふん、黙れ小僧。今からお姉ちゃんがあんたたちばかりぶるにテクを見せてあげる』

「おねえちゃん、メグ、コウ君とばかりぶるなんかじゃないよ。コウ君は私のめしつかいな」

「ひっでえな、おい」

例の如く、メモ帳に書いて意思疎通を図るのも慣れたものよ。

そして、私は目の前の小さなUFOキャッチャーに目を向け、ガキどものお目当てのヌイグルミを探す。あつた……あの奥の四隅の埋まっている盲目のさちゃんか。……無茶じゃないの。何あれ、私はすーぱーまんでもサイコメトラーでもないのよ。正気の沙汰じゃない

い、あんなの取れたら高層ビルの屋上から紐なしばんじーしてやるわ。

……………。

しかし、私は不可能を可能にする女、日向向日葵、十八歳です。

あ、今なんかかっくいいこといった気がする。とっ、とにかく、ここまでガキの前で見栄を張ったのだから逃亡するわけにはいくまい。見ていなさい、行く末を支える未来のガキたちよ。三十分後には、目的のうさちゃんどころか、このキャットチャーの中身を空にしてくれるわ！！

《三十分後》

「なーなー、おねえちゃん……そろそろ諦めようぜ。俺のお財布の中身が悲惨なことになってるんだけど」

『う、うるさい！！ わ、私はできる子。やればできる子なのよ…』

…集中集中』

「いいかつこしいの大人が恥かく構図」

バカップルの片割れの少女がツマライものを見るような眼で私を観察する。

くう、み、見てなさい……次こそあつと驚かせるようなアクロバティックなキャットチャーを見せてあげるわ。そんな私のスツポンのような粘りが功を奏したのか、適当にキャットヤングしたヌイグルミはそのまま持ち上がり、景品取り出し口に繋がる穴に吸い込まれていった。

『ど、どうよ！！ 見たかバカヤロー！！』

「…………いや、そんなドヤ顔されても。五千円使って、ガ・ラのヌイグルミ一個かよ…………どう考えても割にあわねーよ」

「このガ●ラ、すごぶる気持ちわるーい。やっぱり、メグあっちの盲目うさちゃんが良いー」

バカップルは私が勝ち取ったヌイグルミを受け取ると、次々と文句をぶちまける。

こ、このガキ共……努力して掴み取った景品なのにどうして文句言われないといけないのよ。

た、確かに私も大人気なかったわよ。けどね、かつこいいところ見せたいじゃない。何よ、私はそういう性格なのっ、大体ガ●ラ、かあいじゃない。あっちのウさ野郎なんかよりも、こっちのが断然良いのっ。いいったら、いいのっ。

「……確かに。あのウサちゃんはすごく可愛い。今度は私がやる」

と、よく分からない言い訳を脳内でしていると、いつの間にかUFOキャッチャーの前に新たな挑戦者が現れた。ふふん、随分と簡単に言ってくれるじゃない。まあ口で言うだけは言えるからね。見栄を張ったからには、やってもらわなきゃね！失敗したら、鼻で笑ってやるわ、ふふん（↑失敗した人）。

「おねえちゃんもやるのか？ やめとけよ、そこのおねえちゃんも五十回しても取れなかったんだからさ」

ガキは私を指さし、新たな挑戦者に警告する。

何よ！ガ●ラ、取ったじゃないガ●ラ！！かわいいじゃないっ、ガメラ！！

「心配ない。私は嘘を吐かない、だから安心しろ、僕」

「……その手は何だよ」

「五千円あれば充分」

「豪快にミスる気、満々じゃねえかつ!!」

……ふふん、取れるわけないのよ。

今の内そのデカい口を叩いてなさい。現実は厳しく、そして夢見たものはことごとく結果の前にひれ伏すことをこれから思い知るのよ……。私はこれからの無様なミステイクに心の中で密かにほくそ笑みながら、心のクラッカーの準備をしていた。

……え？随分といい性格してるな、って？

いいじゃないの。他人の不幸は蜜の味ってね。

「ぶい」

……。

「ぶい」

『ぶいぶいうるさい』

「一発でとれた」

『や、やかましいっ』

バカップルの子供達はどうに何処かへ行き、駄菓子屋のUFOキャッチャーの前には惨めな私とキャッチャー王者の少女の二人きりとなった。……そうよ、惨めなのは私。目の前の少女は勝ち組。笑いなさいよ……ふふつ。笑いなさいよっ、ばかあ!!

「あはははは」

『笑うなっつ』

「笑えと言ったり、笑うなと言ったり……少女の心理はとてもむづかしい……」

目の前のセーラー少女はしょんぼり顔で呟く。

肩口で切り揃えられたショートカットに、円らな瞳、幼さが残る顔、病的なほど白い肌……一つ一つのパーツが人形のように綺麗に整列している……ってどこぞのバカ少女に大変似ているなこの少女。……む、ちよつと待て。今変なこといったぞこやつ。

少女の心理は難しい？

何言っただか、あんたも少女じゃないのよ。

「……向日葵。私は雄、だから少女の心理はむづかしい」

目の前の少女は真顔でそう呟いた。

ちよつと待て、ちよつと待て、ちよつと待て。ツツコミどころが満載……ではないけれど。

二つほどツツコミ要素がある。

一つ目。

何故、私の名前を知っている？私はこの少女にまだ名前を言っていない。

第一、偶々会ったばかりの見ず知らずの、これから生活していく上で忘れるかもしれない他人に名前をぼんぼん教えたりなんかは普通しない。ソレが……何故？……もしかして、私のファン？そんなわけない。……ストーリーかしら！？ストーリーかしら！？

そいで、二つ目。

『私は雄』

『私は雄』

『私は♂』

.....。

一瞬、時が止まったじゃないのよ。

しかし、それにしても面白い冗談である。そんなセーラー服を着て、私は男です？

そんな可愛らしい顔して私は男です？そんな.....男です？冗談にもほどがある。私は可愛いものは大好きだが、ゴマ納豆と泥棒と水虫と嘘つきは大嫌いなものよ。そんなことを考えていると目の間にいる美少女は私をじっと見つめ、呟いた。

「私は雄。何なら、私のぼんぼん見るか？」

ぼんっ...!?

な、何よ.....ぼんぼんって。す、すごく.....その、いやらしい響きじゃないのよ。

あー、げふんげふん。私は一応、こう見えても女の子なんですからね。そういう下品なのはいけません、ハイ。し、しかし.....ぼん、って別にコーフンしているわけじゃないんですからね。

『ねえ.....ぼんぼんって何？』

「？ ぼんぼんはぼんぼん。見るか？」

『いやっ、そんなイケナイのよそんな行為は.....!! だめっ、だめだめ.....!!』

「?? ぼんぼんはいけないのか？ ぼんぼん.....見てほしい」

そう言うと、美少女は上のシャツを捲り上げ始める。

あーあー!! だめだめだめえ!! 痴女よこの子!! 淑女のわ、私が止めてあげないと。

そして私は止めようとしたが、捲りあがったのは心臓あたりまで。

つまりはお腹丸出し。

『……へそ?』

「ぽんぽん」

『えと、つまり、ぽんぽんってのは……お腹のこと?』

「ぽんぽん」

えーっと……もしかしてもしかしなくても私の勘違いってことですか?

ぽんぽん……すっぱんぽ、げふっげふん……と思っていた私の勘違いと?確かに、お腹を赤ちゃん言葉に訳せばぽんぽんと言うけれど、リアルでぽんぽんとか言う人初めて見た……。

「胸、触ってみて」

『な、何ですって!? そ、そんな?ズレズな展開私は望んでないのよっ』

「いいから、ほら」

もにゅっ、もにゅっ……。

うわあああ、私ったら、私ったら!人様のお胸を触っちゃった!触っちゃった!

ど、どうしよう……これはもう、責任をとるしか。

……ん?

何、このゴツゴツした感触。お胸様って、こんな硬かったわけ? いや、おかしい。自分の胸をもんだことあるから分か……あによ、その眼は。

これは、えと、もしや。もしかして……そのつ。

『あ、ああああ、あんたっ……！ お、おと……男お！？』
「……だから、先刻からそう言ってる」

お、男……。

いや、可愛い男……これは、男の娘……！

な、なんてことかしら。引っ越し早々、男の娘なんていう人種を見
つけちゃったじゃないの。

ふ、ふふっ、慌てるな私。深呼吸深呼吸……すーはー、すーはー……
……ふう、落ち着いたのよ。

「どう呼んでもらっても構わない。しかし、私の名前はコスモス。
大宇宙の方ではなくて、秋桜の方。そして、向日葵が数時間前に出
会った私と瓜二つの容姿を持つ女、つまりは紫陽花は私の双子の妹」

新事実発覚。

どうやらこの少女、じゃなくて男の娘の名前は秋桜ちゃん……じゃ
なくて君か。

そして、秋桜くんは紫陽花ちゃんの双子の兄。なるほどなるほど……
……納得納得。しかし、ツツコミどころはまだある。何故、こいつが
私の名前を知っているか、ということだ。

「そして、向日葵。私はお前に今からとても残酷な事実を伝えなけ
ればならない」

秋桜は変わらぬ真顔で、淡々と言葉を続けた。

「お前とお前の父親は三日後に死ぬ」

夕刻を示す朱色の光にさらされた秋桜はどこか神々しく、そして同時にどこか弱弱しく感じ取れた。

ハジマリ

『武さん……』

『百合子……』

それは遠い遠い冬の幼き頃の私の記憶。

障子の隙間から覗いたその世界は、まるで知識のない幼少の私にとつては只の光景に過ぎなかった。別にその部屋を意図的に覗こうとしたわけではない。

ハジマリはほんの些細な出来事であつた。

庭先で何の気なしに木の棒で蟻をつつくという子供さながらの遊びをしていた夜のこと。

都会の、しかも住宅密集地には珍しく、庭先に一匹の蛸が舞っている光景を私は目ざとく発見した。いや、季節とか土地柄とか考えればもう珍しいとかそんなレベルでは片付けられないと思うけれど。兎にも角にも、幼少の頃の私はソレにとっても興味を引き、蛸を目で追った。

夜間に見える一匹の蛸は周りの黒の中で光り輝き、余計にソレが私の幼心を刺激したのだろう。

そうして蛸は寒空の下、ふわふわと風船のような動きをし、一戸建ての民家に向かっていく。その民家はまさに私と父と母の家だったのだが、私は蛸を目で追うだけでなく、ついにはふらふらと歩いて追つていった。そして、庭先の廊下を跨いだ先にある僅かに開かれた障子の隙間に蛸は入っていった。無論、好奇心に満ち溢れた幼い私がソレを見逃すはずもなく障子に手をかけ、部屋に入ろうとしたまさにその時。

障子の隙間から見た光景は別世界だった。

『はあはあ……！ ああつ、ああう……！』

『うつく、くつ……！ 百合子……百合子……！』

頼りない蛍光灯の下、敷かれた布団の上に重なる男女二人。

揺れる裸体、ほとばしる汗、異様な臭気、パンパンツと定期的に鳴る音。

幼い私にはソレが只の光景にしか見えなかった。しかし、その光景が普段映る世界、視界とは全然違ったから。只の光景に見えても、私はその光景から目を離せなかった。

『違う……違うっ！！ わ、私は……い、いやいやいやあ……！』

『は、はあはあ……はあ、百合子、百合子っ、おっ、俺はお前のことを……百合子お……！』

母の方は父の度重なる激しい尻打攻撃に耐えきれなくなったのか、四つん這いの状態から必死に離れようと試みるが、父の脂ぎった芋虫のような指が白い尻を掴み、それを許さない。只の風景として捉えていた幼少の私には父が母を苛めているようにしか見えなかった。今思えばあれは、何ていやら……げふんげふん。とにかく、そんな光景を見せられては掴みかけた障子を開く勇氣はなかった。

『あ、あなた……も、もう……』

『うつ……うつ。百合子……俺はまだ、まだまだだ。はあはあ……それとも、何だ？ お前は俺を差し置いて、勝手に、はあはあ……勝手に行くのか……？ んん？ ええ、おい？』

『そ、そんな……ひ、酷いつ、あうっ……！』

父は尻打攻撃だけでなく、弱弱い子犬を責めるような口調で母の耳元で囁く。母は母で口では嫌々言いながらも、もっと躡けてくさといっていう表情を浮かべている。

人が違う。

私に対して教師の如く厳格でいつもつらく当たっていた母。

正反対に、私に対して優しくも、赤の他人のような物腰で氣遣っていた父。

言わずもがな、日常風景はかか天下であることは言うまでもない。それがどうだ。

獣のような荒々しく、切羽詰まった形相でただひたすら目の前の獲物を喰う父。

獣の捕食活動に、ただただ涙を浮かべ、ひたすら喰われるがままにいる母。

何だこれは。

人間こうも変われるものなのだろうか。

幼い頃の私がそこまで考えが及んでいたわけではないが、少なくとも奇妙なモノだと感じていただろう。

その時の私は……一体、どんな表情をしていたのだろう。

『はっ、はっ、やっ……あう、あう！』

『はあはあ……！ そっそうだあ、お前はそうやって犬のように鳴いていればいいんだっ……！ 俺が上でお前が下……そうだよなあ、百合子お！……』

……。

ところで一体いつまでこの悪夢を見続けなければならないのだろうか

か。

立派でたわわなバデエに育った私にとってはその行為の意味するところは無論、知っているので両親の粗相は苦痛でしかない。ぱんぱん、ぱんぱん、ぱんぱん、ぱんぱん……こらあ、早く出せ遅漏おやぢ。

『うう……うっ』

『あっ、あ……』

唐突に仰け反る二人。

それはその行為の終着点を意味した。そして、疲れ切った二人は服も着ないで、同じ布団の中で抱き合った。そうして、二人は互いに見つめ合い呟くのだ。

『百合子、好きだよ』

『ええ……私、も』

そうして優しい抱擁の後のキス。

その光景の一部始終を見つめていた私は、扉の障子に再び手をかけ――。

そこで私の悪夢は途切れた。

「お前とお前の父親は三日後に死ぬ」

目の前にいる少女もとい男の娘である秋桜は淡々とした表情と声色

で私にそう言った。

私が……死ぬ？父も……死ぬ？それも、三日で……？

……………。

まさか、この少女兼男の娘は未来を予想できるマジカルでトロピカルな能力を所有するエージェント……という中二設定が自分にはあると思い込んでいるのだろうか。

『……痛い、激しく痛いだよ』

「わふあひいのふおふおもふあへふいふいふあふいひ（翻訳：「私の頬も激しく痛い」）」

私はぶっ飛んだことを仰る目の前の野郎の頬を無意識に抓っていた。しかし、まさか男の娘の上に中二病を患っている方と出会うとは……これも変人を引き寄せる魅力的なナイスバディの所為ね、ふふん（↑テングな方）。

「……ふいふぬー（翻訳：「……ひんぬー」）」

秋桜は私に頬を抓られながらも、何処かシラーとした瞳で私を見つめて口をもごもご動かす。

……今なんか馬鹿にされたような気がしなくてもないけれど、兎にも角にもこの状態では話にならないのよ。私は手を離し、解放してやった。

「……痛い。……向日葵はとても激しい」

解放された秋桜は抓られて赤くなった頬をサササ触り、涙目になる。

こら、そんな女みたいな拳動を取るんじゃないのよ。この野郎、

本当に野郎なのかしら。

疑わしいものは確認しないといけないのよ。そう、今奴が油断している隙にセーラー服のスカートとパンティをずり下して………冗談なのよ、もしかして本気にした？

『とにかく、冗談でもそんな性質の悪い冗談はやめなさい。本気で怒るわよ?』

「……ごめんなさい。もう言わないから……向日葵に嫌われたくない……」

じわ……。

秋桜は涙声でそう呟く。

くっ、くう……な、何かしら。この罪悪感は……私は全然悪くないのに、悪くないはずなのに。な、何よ……そんな上目遣いで見つめてもな、何も出ないのよ……。な、何よこの可愛い生き物は。お、恐るべし男の娘。

「あ、あつーー!! お、お前つ、私のにいに何してる!？」

突如、背後で声が聞こえてきたかと思い、振り向くとそこにはふんぬーの表情をしたセーラー服姿の女の子がいた。こいつは……目の前の涙ぐんでいる男の娘とふんぬー少女を交互に見やる。瓜二つの容姿を持つ姉妹もとい兄妹……。

『……単細胞生物なのよ』

「は、はあ！？ な、何だお前は！ いきなりわけの分らないこと書くなあ！！ それより、にいにを苛めたなお前！！ 謝れっ、私に」

…………… お前かよっ。

と、あれなのよ。こいつはつい先刻に出会った向日葵摘み取り娘、紫陽花なのよ。

しかし、二人並んでみて分かるのだけど、本当にくりそっね……。シャッフルしたら、どっちがどっちが分かんないくらいに。ただ、見た感じ性格は正反対のようだけれど。

「…………… 紫陽花。にいには向日葵に謝罪中なの。だから、紫陽花…………… 謝れ、私に」

……………。

いや、それも何かがおかしいのよ。

「そ、そうなのか…………… にいに、ごめん」

…………… 謝るのかよ。

「そう、それでいいの。じゃあ、向日葵にも謝るの、紫陽花」

「わ、わかった…………… おい、お前」

紫陽花は兄の秋桜に私へ謝罪するよう促されると、ズイツと偉そうに私の前に出てきた。

…………… それが謝罪する態度なのか、おい。

「くたばれっ、ぱいぱん！！」

なっ、なあ！？

「ところで向日葵、お前は駄菓子屋で何をしていたの？」

秋桜は再び、無表情で私にそう聞いてきた。

こら、さらつと流してんじやあないのよ。くっくう……めちゃくちや腹立つのだが、ここで切れたら奴の思うつぼなのよ……。ムシムシ、子供の言う些細な悪口は無視するのが立派なバデエを持つ大人の心なのよ。そして考える、私は駄菓子屋に何しに……。

『そ、ソーダ』

「……そーだ？」

『ソーダーよ！ ソーダー！ そこにあるソーダーが飲みたかったのよー！』

「向日葵はうまいこと言う」

そ、そーだった……私はソーダーを飲みたくて駄菓子屋に立ち寄ったのよ。

けれど、私のポケットマネーはマジぱねえ状態で……いったん戻って、父からお金を借りに、い、いや、目の前の駄菓子屋にあるソーダーは一本きり。戻っている間に誰かが買う可能性も……。ど、どうしよう。当初の予定では、UFOキャッチャーにいたガキふたりに恩を売って、お金を恵んでもらおうと思っていたのに……！く、くう、この男の娘が邪魔しなければ、邪魔しなければ今頃の私は、私はあ……！

「ふっ、フフ……！」

『……おい、そこメス豚。何、笑っているのよ』

「このソーダは私が買うつっー！」

『な、なんですってえ！？』

ま、まさかの購買宣言！？

し、しまった……このメス豚もとい紫陽花はここぞとばかりに笑みを浮かべているのよ！？

そ、そんなことされたら私は、私はあ……。

「フハハハハ、この私はソーダーを買うのだ。ではお金を……」

「ごそごそ、ちゃりりーん。」

紫陽花の掌にはギザ十が一枚。

「……にいに、お金貸して」

「持ってない」

「……」 (紫陽花さんの只今の所持金十円)

「……」 (向日葵さんの只今の所持金九十円)

……。

『よ、よこしなさいっっ！！ 今すぐその十円を私によこしなさいっっ！！』

「い、いやだあ！！ これは私のだあ！ お前こそその九十円をわたしによこせばかあ！！」

『なんでよっ！？ あんたの方が圧倒的に少ないんだから私が買うのが筋ってモンでしょ！？』

「筋もクソもこんにやくもあるかあ！！ うがぁー！！」

「……ソーダーごときで二人とも子供なの」

結局、ソーダーはそうこうしている間にどこぞのガキが買っていく

ました。

ママハハ

黄昏時。

昼間はクソを何回言っても言い足りない程、暑かったのに夜を迎えるとホッキョクグマが凍てつく程、寒くなる……というのは極端かもだが、兎にも角にも田舎もとい山の気候ってのは砂漠の如く、昼夜の寒暖差が激しいのよ。昼間搔いた汗でべとべとになったワンプイスも、どこから伴う山風に晒され、私の体温を容赦なく奪っていく……うう、寒い、早く帰るのよ……。

帰る場所があそこなのは少々、鬱だけどきつとあの禿げおやぢもとい父ならうまいことその場をやり過ごしていることだろう。あれで私の父は三十年以上、社会人のストレスの波に散々吞まれ吞まれまみれの自分に酔いしれているナルシストおやぢなのよ……だから、顔的にアレだけど、あれでその場の空気の読める気さくなおやぢなのよ……ふふ、自分で言ってるアレだけど、どんだけ自分の父を貶してんのよ、私。

まあ、それはともかく今の私の帰る場所はそこしかないのだ。排ガスが香るあの街とはもうおさらばしてきたのよ。それが、例えば父や私の意思に関係ないものであるうとも、今は目の前の現実を潔く受け止めるしかない。そうよ、人生は多少のスパイスと大量のシユガーがあれば楽しいものなのよ。現実的にはその逆パターンが多いのだけれど。

そんなつまらないことを考えながら家路を歩いていると、ふと背後に気配を感じた。な、何奴っ……！？す、すーかー！？と、通り魔！？それとも犯罪者繋がりで変態露出トレンチコートおやぢ！？淑女な私としては（異論は認めない）、一刻も早く純情乙女の如く

逃げ出したい気分だが、確認しなければならない。そして私は恐る恐る後ろを振り返ると。

「……………」ボリボリ

白髪イケメンがいた。

白い肌、中肉中背、グラサン、緑のアロハシャツ、紺の半ズボン。

……あによ、この常夏野郎。私はビックリさせたお仕返しに、キッと常夏野郎を睨んだ。

しかし、肝心の常夏は澄ました顔で頭をボリボリ掻いて、私と目を合わせようもしない。

それどころか、そのまま私の横を通り過ぎ、前へー

『ちよつ、ちよつとおお待ち！！』ガシッ

「……………」あん？」

私は通り過ぎてそのまま前へ歩こうとした常夏の肩を思いつき掴んだ。

に、逃がすわけないのよ……淑女の私に怖い思いをさせたその罰、とくとその身体に刻み付けてやるのよ！！……一応言っておくけれど、別にエロいことじゃないのよ。

『よ、よくもこの私に……怖い思いをさせたわね……』

「……………」逆ナン？」

『ふざけてんじゃないのよっ！！ あんた、名前及び住処を言いなさい。ポリスメンに突き出してやるわ』

「俺の名前？ 俺、ガクト。住処は処女のハートの中、ズッキューン」

『ふ、ふ、ふ、ふざけるなこらっ！！ 私は真面目に聞いているのよ……』

な、なによ、何なのよこの男は……！！

こんな常識知らずな優男ははじめてだっ！！ふ、ふふ、ど、どうしてやろうかしら……ま、まずはそうね……向日葵エルボーからのマウントポジションを狙い、そこからさらに向日葵腕ひしぎ十字固めの最後に向日葵スペシャルで決まりね、ふふ、ふ……。

「えーっと、何でそんなに怒ってるんかねえ……。大体、俺あんたみたいな変な女に絡まれる覚えはないんだけどねえ……。ちなみに何ですかその手帳。乙女の交換日記ですか？　ウブっだねえ。ヒヤッハ―」

非常識常夏野郎は頭をボリボリ掻き、めんどくさそうな表情でそんなことを言う。

何がヒヤッハ―　だ万年常夏馬鹿野郎が。私は絵本に出てくるようなふあんたじい要素の強い、優しくてカッコいい白馬の王子様は大好きだが、あんたみたいなヘラ男は大嫌いなよ。そして、私は続けて、手帳に言葉を書こうと……。あ、あれれ！？わ、私の手帳が消えた！？

「へえ……キ・イチちゃんの手帳じゃないか。かぁいいねえ……何か、中身は殴り書きの文字があんだけど。……ぼっち会話？　もしかして、君……結構イタイ系の人な感じ？」

消えた手帳はいつの間にか、常夏の手に渡っていた。

常夏はヘラヘラしながら、私の手帳をばらめくっている。……ぐっ、くう……あ、あによこの羞恥プレイは……く、くううう、こ、クロス。この常夏は肥溜めに放り込んで殺してやるわ……！そして、恥をかかされた私は再び常夏を睨……

「へえ、君って美人な感じだね」
「!？」

め、目の前にや、や、奴の顔が……ちよつ、ち、近い!!
私は突然の接近に驚き、奴からぷいつと顔を逸らした……が。

「おつと、ハハ、恥ずかしがった表情もG」だねえ」

顎を掴まれ、無理矢理、奴と正面を向かされる。

な、な、な、あ、何がG」よつ……!こ、この私を誰だと思ってるの……!?

ゆ、許さない……許さないのよ……!!こ、ここのつ、ここのここ……!!!!

「キスなんかしちゃったり……むーん」

奴は唇を尖らせ、私の頬に柔らかなそのつ……唇がっ

うがぁー!!

バコッ

「あふんっ!？」

私は思わず、膝を駆使して、思いつき奴の股間を蹴り上げた。
その瞬間、奴はヒキガエルの如く、仰向けに倒れた。ふっふふっ……!どうよ、私の秘儀キンターマッスルドッキングを喰らった感想は……!?ふ、ふんっ……こ、高潔な私のぷっちんもちもちほっぺに気色悪い唇を近づけるなどというふざけた真似したあんたが悪いのよ……!!死んで罪を償うのは当然なのよ!!

「……あれ、あにい？　こんなところで寝転んで何してる？　ここはあにいのベッドじゃないの」

「にいに……。こんな浮浪者ほつといて早く帰ろ？」

と、常夏をのしたところで、今度は昼間の双子がやって来た。

またあんたらか……。最近、よく出会うのよ。切っても切れないナンタラカンタラとかいうやつだろうか。

……………。

冗談なのよ、自分で言ってる鳥肌が立ってきたじゃないの。私は、ドラマの中で役者が臭い台詞を言っているのを聞く分はいいけれど、自分で臭い台詞言うのはお断りだ。

「ぐ、ぐう……。ひ、ひどいっ！　あたい、ママやパパにもおちん●を蹴られたことないのにつ！　このメンヘラ女！！」

『やかましいっ、変態はとっとと巢に帰れナルシー！！』

股間押さえて、涙目で私に抗議する常夏野郎。

「にいに、そろそろ晩御飯の時間。早く帰るの」

「おお、秋桜。もうそんな時間なのか。それにしても我が妹（？）にしてかわいいのう。くのくのう」

「私のにいに汚い手で触れるなロリコン！！」

ゴッ

「くおお！？」

双子の姉妹（？）に絡む変態常夏。

……。？にいに？……。あ、え、いや。まさかまさかの。

……。ないわね、それはない。

恐らくは、その常夏が双子姉妹にそういうプレイをするよう脅迫

しているのね。それなら納得なのよ。

「……あ、向日葵。昼間はありがとうなの。もう少し遊びたかったけど、もう晩御飯の時間だし、また明日」

「ギャー、あ、あ、紫陽花っ！お、俺のっ、おにいにの髪を引っ張らないでえー！！」

「うるさいっ、黙れ、はげっ」

私に気付いた秋桜はそう言うのと紫陽花と常夏野郎を伴って、歩いて行った。

何だったのよ一体……。嵐のような一時だったわ。まあ、いいのよ。それよりも早く帰らないとあの子煩惱おやぢが心配するのよ。私は夕焼けに晒されたヒマワリ畑を尻目にこれから住む祖父母の家に向かって歩を進めた。

「お帰り、向日葵。こんな遅くまでどこに行ってたんだ？パパはとっても心配したんだぞうー？」

玄関の扉を開くと、待ち構えていたかのように父がタイミングよく現れた。

……何がパパよ。自分の面を鏡で見てからモノを言え。思わず、手帳に書きたくなる衝動を抑え、玄関でサンダルを脱ぎ、家が上がった。ふう……子供っぽいおやぢを相手にするのはとっても疲れるのよ。

「あらあ、向日葵ちゃんなのね。元気？」

そして、父の後ろにいる女性が古き良き友を懐かしむように私に声をかけてきた。

ロングでウェーブのかかった金髪、シャネルだかチャネルだか知らないが明らかに高級そうな指輪やネックレスに胸元の開けたエロスな服装に網タイツのパンツが見えそうな短めのスカート。……もう詳細を語りたくないくらい目を逸らしたくなるような痴激的な格好をしたおねーさん。

……誰よ、このおばはん。はつきり言つて、私はこんな痴女に見覚えはないのよ。父の新しい愛人が付き人が何かだろうか

「覚えていないかしら？ もう十年も昔のことだしね……うちの子の、ほら双子の方と貴方仲良くやっていたわね」

……はあ？

このおばはんは一体何を言っているのだろうか。十年かなんだろうか知らないが、私がこれまで生きてきた人生の中に『幼馴染』なんという存在はいなかった。私の記憶が正しければ、十年前と言えばあちこち移り住んでいた時期だ。もう、父の仕事の都合で引越しているのは慣れてきたけれど、子供の頃の私は引越越えるたびに、父を恨んだものだ。特定の友達ができないって、ね。

……。

そんな思い出の中に、付き合いの深い幼馴染なんていなかったし、いたとしてもその場限りの『お友達』だ。ましてや、双子なんていう狭いジャンルで……ううん、やっぱり私はこんな成金おばはんは知らないのよ。しかし子供じゃない大人のナイスバディな私は例え、見知らぬ人間であっても会釈するくらいの社交辞令という名の常識は身に付けているのだ。

「うふふ……お辞儀だなんて、ほんとお利口さんに育ったわね向日葵ちゃん……」

目の前のおばはんは、口元を歪ませ、何処か不気味な笑顔を浮かべてる。

○

なにかしら。この胸やけするようなドロドロとした感覚。

それは相手は自分の存在を知っていて、けれども自分は相手のことを全く知らなくて。

無色透明の自分の部屋を外から第三者に覗かれているような気分で。

「ほんと美人になったわねえ……黒髪もサラサラで綺麗で、肌も白くて綺麗で、綺麗で、綺麗で、綺麗で、綺麗で、綺麗で、綺麗で、綺麗で、綺麗で、綺麗で、ウフフ……」

髪やら腕、首筋、顔をぺたぺた触る。

……全身をまさぐられるような感覚、その感覚の感想を一言で表すと。

不快感。

ソレが全てであつた。

「向日葵、もう忘れちゃったのか？ その人は俺の弟の嫁さん、つまりはお前の叔母にあたる人で榊優香さんだよ」

「はろはろー、んもう！ 武義兄さんつたらあ！ そんな他人行儀にならなくても良いって言うてるでしょー？ 私たちは家族なんですもの」

「そ、そうか？　なはっ、なはははは」

ちょうどいいタイミングで父が会話に入ってきてくれたので私はその櫛とかいう叔母から一步、下がる事ができた。……こら、何ヘラヘラして鼻の下を伸ばしているのよ馬鹿おやぢ。ちよつと胸が大きくて、美人な女になびくのだから世の男は本当に単純なのよ。

それにしても優香……ね。

名前を考えた親に言ってやりたいわ。

分不相応な女に分不相応な名前をつけるなってね。

「おっ、そうそう。居間にその双子がいるから仲良く宜しくしてやってくれよな向日葵。まあ、昔、遊んでいた仲だから大丈夫だよな、なははははは」

「じゃあねー」 向日葵ちゃん」

父と優香は談笑しながら奥の部屋に入っっていた。

……何がじゃあねー、よあばずればバア。だいたい、昔から遊んでいたって、私にはそんな双子の記憶はないのにどう仲良くしろと言うのか。はつきり言っ、何だか気分が悪いのだが、このまま廊下でばけーっとしていても意味がない。私は意を決して、居間の扉を開いた。

「……おー、向日葵なの。おっす」

「……げえ！？ 昼間のぱいぱん女！ お、お前っ、うちに何しに来た！？」

……双子、って聞かされた時点で大体想像はついたけれどね。

いや、お前ら登場回数多すぎだろ。私が居間に入ると高そうなソファに座っている美人姉妹（？）の双子……つまりは秋桜と紫陽花がいた。兄の方はソファから足をテレビに置き、全くもってお行儀の悪い子供の様であった。

「あ、ああー！？ にいに！ スカート！！ スカートが盛大に捲れてる！！ そのパイパン発情雌犬に覗かれるよ！！」
「んー？」

傍にいた紫陽花は兄のスカートを慌てて直しているが、兄は特に気にしていないのかくつろいでいる。こら、誰がパイパン発情雌犬よこのクソガキ、本当に口の悪いガキね。だいたい、パイパンってのは何よ。あんたは私のチヨメチヨメを見たことあるの？……その、あの、まあ、その辺の有無についてはノーコメントの方向で。……あによっ！ その眼は！！

「……向日葵」

秋桜は上目使いで私をじっと見つめてくる。

……何よ、何でこの生き物はちよつと頬を染めているのよ。

「……私のパンツ、見たの？」

……。

見てないのよ、ばーろー。何よ、この生き物は。男の娘ってのは、こつも破壊力が抜群な生き物なの？ 下手な女よりかぁいいじゃないの。だからって、私は決して女の尊厳を見失ったりしていないのよ。
……… 本当なのよ。

「く、くう！ お前っ、その顔はみたなあ！？ にいにお気に入りのクマさん毛糸パンツを見たんだなこのどへんたい！！」

……おい、語るに落ちてるのよ。

「……紫陽花、にいにの履いてる下着をどうして知ってるの」

「は、はうう！？ あ、あ、あ……！ こ、このっ！ ひどいぞ！ わなかつ！？ こうみょうなわなで私の口からにいにの下着の種類を言わせるなんてなんて鬼畜な女なんだ！！」

……。

どうしよう、段々と目の前にいる小動物（♀）が可愛くなってきたのよ。

「……紫陽花。罰として今日のお風呂でオシオキなの」

「は、はにゃーん！！」

こうして妹の紫陽花ちゃんは兄の秋桜ちゃんの下着を口外した罰でお風呂でオシオキの刑になりました。……何てつまらないオチなのよ。それに、オシオキ宣言された紫陽花は何でちよっと嬉しそうなよ。もしかしてドMな方なのかしらこの娘。

『……しかし、あんた達があの成金おばはんのお尻から生まれた子供だとはとても思わないわ』

私はつい、思ったことを手帳に書いて、双子に見せてしまった。

……しまった、ちよつと無神経な物言いだっただけ。あんな親でも、この子達から見れば自分を生んでくれた親には違いないのよ。私は少し自己嫌悪に落ちて、双子の次の言葉を待った。

「……………あんなの、私たちのママじゃない」

意外にも、最初に口を開いたのは妹の紫陽花だった。

その眼はまさに拒絶を示したもので、憎悪を感じる口調で、普段のやんちゃな紫陽花の声とは思えない程のドス重い声であった。ママじゃない……………私は何と答えたらいいのか脳内で考えていると、助け船を出すように、兄の秋桜も口を開く。

「向日葵、あの人は私たち双子の本当のママじゃないの。二度目のママ……………向日葵、この意味が分かる？」

……………それくらい分かるのよ。

『ママハハ』

継母、つまりは血の繋がっていない赤の他人の意。

前母が何かしらの事情で父と別れた後、再び新しいお母さんが子供たちの前にやってくる。

よくある話だ。

だからと言って、ママハハを悪く受け止めないこと。

例えばママハハであろうとも、実の子のように、他人の子を分かろうと必死で頑張る母もいる。

その逆も、あり得ることなのだが。どうやら、この子達の様子を見ると後者の意味合いが強いようね。

「……………」

余程のタブーな話だったのか、今に沈黙が流れる。

……………ど、どうしよう。これって明らかに私の所為よね。な、何とかしなきゃ。

……。
だ、誰よっ！！今、私のこと、ヘタレとか思った奴！！で、出てきなさいっ！！

「向日葵」

どきっ。

沈黙は早い段階で、秋桜によって破られた。
な、何だろう……。わ、私は何を言われるのかしら……。私はドキマギしながら、秋桜の次の言葉を待った。

「私達と一緒に、三人でお風呂に入ろうなの」

『「……………はあ？」』

秋桜の突然の意外な申し出に、私と紫陽花は驚き、ついでに被ってしまった。

……………正確には被ったじゃなくて、重なったとも言うべきなのかしら。

カーニバル

白い霧を連想させる湯気が辺り一面の視界を妨げる。

私は白いバスタオルを身体に巻きつけただけの姿で呆然とその場に立っていた。

……こら、エロい想像してんじゃないのよ。

ここは別にらぶほじゃないし、ましてや私の傍にはあはあ言ってる禿げ茶瓶のいやらしいおやぢもいないのよ（えんこーとかいうお下劣な妄想した奴はとつとこ帰るのよハ・太郎）。

極めて健全な大浴場なのよ。……あれ？健全じゃない大浴場って何よ。

「……？ 向日葵、どうした？ ぼーっと突っ立って……早くお風呂に入るの」

後ろからの可愛らしい声が私の耳に入ってくる。

振り向くと、そこには肩口で切り揃えられたショートカットのお人形さんのような愛らしい顔とペガサスのような白き肌……というダブルパンチなインパクトを持つ男の娘がいた。

そうよ、目の前にいる奴は女の私から見てもム力つくくらい綺麗で、そして可愛い女……じゃなくて、男の娘、そうよ、彼奴はオ・ト・コ・ノ・コ、なのよ。オニヤノコなのよ。

奴の名前は秋桜。

随分回りくどくなったけれど、とにかくその男の娘も私と同様、バスタオル一枚を裸体に巻いただけの格好で私に続いて大浴場に入場してきた。……色々と突っ込みたいことは山々なのだが、とりあえず、その雌を連想させる内股で歩くのはやめるのよ。

「わっ、うわっ、温泉だっ！　温泉だっー！！　にいに、温泉だよ！！　わーいつー！！！」

そして、三番目に気でも狂ったかのように全裸で乱舞しながら入場してきたのは秋桜と同じ容姿の双子の妹、紫陽花なのよ。コイツは秋桜と違って真正銘の雌なのよ。……おい、お前はそこにいる男の娘を見習うのよ。色んなところが現在進行形で痴部のバーゲンセール状態なのよ。同じ女としてとっても恥ずかしいのよ。あと、温泉じゃなくて大浴場なのよ。

「紫陽花はとっても元気に育ったの、にいにとして私はとっても嬉しい」

秋桜は湯船でじゃぶじゃぶ泳ぎだすおバカ妹を眺めながら、そんなことを言う。……あれは、果たして元気という一言で片づけても良いのかしら。一度、頭を切開して医者に診せた方が良いのよ。

ピローン、ピローン、ピロピローン、

……音？何の音かしら？

突然、私の背後から何やらけったいな怪奇音が耳に入ってきたので、私は気になって恐る恐る後ろを振り向いた。

「ぬふっ、ぬふふふ……しめしめ、しめしめ、しめしめ。やはり若き白き女子の肉体はいいモンですなあ……。ぬふっ、おっぱいげっちゅ、尻肉げっちゅ、すまいるげっちゅ、ぬふっ、ぬふふふふ……」

……」

旅館の仲居さんみたいな格好をした黒髪のツインテールの女が気味の悪い笑顔で携帯の写メを湯船ではしゃいでいる紫陽花に向けて連

写していた。

……………へっ、変態がいるのよ。

「……………溜羽^{るう}、そこで何をしているの？」

「……………ぬふっ、ぬふふ……………って、へ？ お、お嬢様？ じゃなくて、おぼちゃまー？ こ、これはどうも、エヘッ、エヘヘ……………」

秋桜もシャッター音に気付いたのか、後ろを振り向いて目の前の変質者をジッと見つめている。

溜羽……………？名前を知っているということは、知り合い？溜羽と呼ばれた変態女は秋桜にいきなり声を掛けられてビビったのか、ワンテンポ遅れて、後ろ手に携帯を隠した。……………もうとっても遅いのよ変態さん。

「……………溜羽？」

「……………うう、ごめんなさいですうお嬢さ、お坊ちゃま。私、あまりに元気にお育ちになられた久しぶりのお坊ちゃまやお嬢様に感謝して……………つい、ピロピローンと……………うう、こんなお馬鹿な溜羽を許してくださいましお坊ちゃま……………」

秋桜にジッと見られて観念したのか、溜羽はその場で土下座プレイをして許しを請う。

……………何がついピロピローン、よ。明らかな確信犯じゃないのよこの変態。……………まさか、私の、私の……………いや考えたくない、のよ。お、おぞましいのよ……………考えるのは止めるのよ。

「……………そう、綺麗にとってあげてね溜羽」

「……………っ、は、はいです！ お嬢、もといお坊ちゃまー！」

……あれ？うまいこと話が纏まったのよ。

……こら、その会話の流れは明らかにおかしいだろ。

「お、おおよ？ お坊ちゃま？ ところでそちらの方は……？」

そして、私に気付いた瑠羽は私の方に向き、秋桜に尋ねる。

……こら、その写メを私に向けるのはやめなさい。

「あ、この子は私の従妹の向日葵。私と紫陽花の大切な友達だからこれから仲良くしてあげてね瑠羽」

「ああ、いわゆる流行の『セク友』ってやつですねえ。なるなるー」

こ、こ、こ、この女……。

「初めましてー向日葵様あ。私、この古臭い家屋でお仕えしている和風メイドの瑠羽と申しますう。で、で、で？ さっそくで大変失礼なのですが、瑠羽は向日葵様にすりーさいずを教えて頂きたいのです」

本当に失礼な女なのよ。

くう……こんな時に、こんな時に言葉が紡げないのは苦痛なのよ……。

思いっきり、心の底から火山のマグマのように私の胸中は煮えくり返っているわ。

今の私は余裕で放送コードの禁句をバンバン吐けるのよビッチビッチイ。

「あ、あとあとー向日葵お姉様の初潮の時期は？ オナヌーの経験値は？ セックル末体験ゾーン？ 肉棒経験値は？ オナヌー使用器具は？ あ、最後にい、おっぱい診せて下さい！ ナニをナニさ

せてくださいいゝ」

そして私の返事を待たずに怒涛のように目をキラキラさせて次々にエロスな質問をしてくる瑠羽。

お、お姉様……？ちよつ、ちよつと……ち、近い！迫ってくるんじやあないのよっ……！！

「んうう、初登場記念にポロリサービスくらいしてくださいいゝ」

は、初登場記念って何よ！ぽ、ポロリサービスって何よう！！

ひやつ……た、タオルを掴むのはよしなさい！！

ひ、ひい！た、タオルがはだけのよ！やめ、ちよつ、いやっ……こんな所で！！

「……コラ、瑠羽。やり過ぎなの」

ペコン

「ぎゃふん！」

瑠羽の私への凶行に見るに見かねたのか、秋桜は瑠羽の脳天に空手チョップを入れて、そこで瑠羽の暴走は収まった。

は、はあ、はあ……こ、怖かったのよ。

も、もう少しで胸がはだけ……えっ、はだけのほどの胸は無いよって？

う、う、う、うるしい！！ひ、ひんぬーで悪かったわねえ……！！ぐすんっ。

「ほら、瑠羽。向日葵を泣かせた罰として今日は瑠羽もお風呂に入るの」

「え……瑠羽、トルコ風呂には興味ありますけれど、普通のお風呂には興味ないのですう」

瑠羽は頬を膨らませ、そう言う。

この女は次から次へとよくもまあそんな下ネタを吐けるものね……。まさに、この女は下ネタが服を着て歩いているようなものなのよ……。

「ダメ、絶対。瑠羽もお風呂に入るの」

「ああ、お坊ちゃま！ そんなつ、激しいにやあああ！？ いたつ、あいたたた！！ おぼちゃまああ、擦れてる！ 床のタイルに瑠羽が擦れてますううう、あつてもおっぱいぎもちいい……！！」ずるずるずるずる

そして、瑠羽は秋桜の手によって強制的に更衣室に連れて行かれるのであった。

……。
どうでもいいけれど、あの瑠羽とかいう女はキャラが安定していないような気がするのよ。

「……………」
「……………」あ「ビュッビュッ

そして、二人のいなくなった浴場で私がふと湯船の方に振り向くと、ちょうど紫陽花が両手でぼっち水鉄砲をしていた。

「み、みるなばかあ！！」「ピューー

……………。
見られて恥ずかしいだなんてちょっと可愛らしいのよ。

『湯船に浸かる前に身体を清潔にするのがお風呂のマナーなの』

そんな秋桜の当たり前のような提案により、とりあえずは四人の女子（一人は男の娘も混じっているが）でツーペアを組んでそれぞれが洗いっこするという事になった。いや、何がとりあえずなのかよく分からないけれども……別に個人で洗ったら、と私は思ったけれども紫陽花と瑠羽の強烈なオーラによって私は口を出すことはできなかったのよ。というより、喋れないのでどのみち意味がない……。

「な、何故……どうして、こんな、こんなはずじゃあ……に、にいいい……」

「……………」

私の目の前で涙ぐむ紫陽花。

ペアは公平を期すために、グッパ（じゃんけんのグーとパーを四人で出して、グー同士とパー同士をペアにする方法）で洗いっこペアを決めた結果、秋桜と瑠羽、私と紫陽花という組み合わせとなった。……泣きたくなるのは私の方よ。

「ぬふっ、にゅほほほほ、おぼっちゃまのお肌はすべすべですねえ……すりすり」

「……瑠羽、さっきから同じところばかり擦ってる。それに、くすぐりたい」

そして、私と紫陽花から少し離れたところで、秋桜と瑠羽は洗いっこをしていた。

瑠羽は秋桜の背後から必要以上に、お腹周りをボディソープで優しくゴシゴシ擦っていた。

……おい、これはもしかしてもしかなくても何かのプレイですか教えてエロい人。

「く、くうう……あ、あのびつち……私のにいの身体をべたべたべたべたと……きいいい……！ にいに、にいに肉棒を擦すつたら承知しない……！ 擦るのは私の役目だからっ……！」

紫陽花は秋桜と瑠羽のやり取りを殺意のこもった眼で見守っていた。こら、若い女子が擦る擦る言わない。姉妹丼ですか、いやこの場合、兄妹丼……私は一体何を考えているのかしら。

「くうう……何で、こんなビッチと……」

紫陽花は私を睨みながら、言う。

……おい、誰がビッチよ、誰が。

「……不毛だ。とりあえず、洗う……」

そして、紫陽花はボディソープを自らの手に付ける。

……手？手にボディソープを付けて……何する気よこの子。

ピタッ

はうっ！？

私の首筋にヒンヤリとしたぬめぬめの触感が走る。

ビックリした私は思わず、目の前の少女から距離を取った。
は、は、はあ！？な、何この娘！？い、今私のく、首に……触れた
！？

「こ、こらあ！ 逃げるなあ！！ 逃げたら、洗えないだろこのビ
ッチー！」

紫陽花は距離を取った私に対して、何やらすごい剣幕で怒鳴った。
な、何……何なのよ、何で……私の、首……ま、まさか……こいつ、
こいつそ、そういうケが……ちよつちよつと待ちなさい！！私にそ
んな気は……！！そ、それにさっきのぬめぬめした触感……ま、
まさかローション！？（↑数十秒前のことも忘れる向日葵さん、さ
すがです）

「（に、にには約束を破るとしてもこわい……）に、逃がさな
いぞ向日葵！！ この手で、お前の全身を隅々までゴシゴシ擦っ
てやるう……！！」

紫陽花はローションでぬめぬめとなった両手をワキワキさせながら、
私に一步、一步と近付いてくる……。ちよつ、あ、あれは獲物を狩
るもとい喰う眼だわ……！わ、私は喰われる兎……！？い、いやっ
いやいやいや！わ、私は至ってノーマルなのよ……！そ、そんな……
ひいひい！やつ、やだっ！わ、私のはじめては年収いちおくえんで
お金持ちの笑顔で優しい王子様みたいな人に捧げるって誓ったのよ
……！こ、こんな……！こんなのいやっ……！！

「こら、待てっ…… 私から逃げるなあ……！！」

じよ、じよ、じよ、じよ、冗談じゃないのよ……！！

こ、こんな所で貞操を失ってたまるか！私は後ろを振り向かず、そ

のまま走った。

……が。

「ふっふっふ、お嬢様あ。どうやらお困りのようですねえ」

「あ、びつち……じゃなくて瑠羽！」

ひっ。

わ、私が逃げる方向に秋桜と洗いっこしていたはずの和風メイドの瑠羽がいた！

は、挟まれ……た！？

「お嬢様、向日葵お姉様の身体を擦るのが手だけでは穴という穴は洗いにくいでしょう……？　なら、そんな時はぱっぱぱぱぱ
くん」大人の玩具のバ●ブレクタ」

瑠羽はどこから取り出したのか、いきなりキノコみたいなイヤラシイ形をしたオブジェを見せつけた。な、何よ……！　そ、その危険なブツは……！！　何をするつもりよ……！！

「な、何だそれは……？　ど、どうやって使うんだ瑠羽……？」

「はい、これはですねえ、こーやってローション（もといボディソープ）をこのキノコによるとたあゝっぶりつけてデスネえ……はいっ、ポチっとな」

ヴィイイイ、ヴィイイン

ローションにまみれたキノコは大きくうねりを上げて振動し始め、それに伴って振動により、ローションが跳ね落ちていく。

こ、こらあ！　そんなものはモザイクをかけなさい！！　モザイクを……！！

「ふっふっふ、これで向日葵お姉様の穴という穴を犯、げふんげふん、綺麗に洗えるというわけですハアハア」ヴィイイ、ヴィイイイ
「こ、これを向日葵の穴に挿入すればいいのか瑠羽？　というか、穴ってなんだ？」

あ、穴……ご、ごくり。

って、こ、興奮何てしてないのよ！！あ、あによ！！

……やつ、やだっ、み、見るなっ！！私をそんな変態な目で見るなあ！！私は決してそんなことを望んでいないのよ！！

「さあ、さっそくお嬢様、向日葵お姉様を押し倒し……あ、あるえー？　お、お坊ちゃま？」

「あ………に、にいに？」

「………二人とも、やり、すぎ、なの………」ずももももももももも……

「お風呂上りにヘアーを整えるのは欠かせないの」

お風呂から上がると、秋桜は湿った髪をドライヤーで乾かし始める。……お風呂上がりのヘアーを気にするなんて男の娘はなんてマメなのよ。

「」……「」ガタガタガタ……

そして、隅っこで紫陽花と瑠羽は身を寄せ合って震えていた。
……男の娘最強伝説の始まりなのよ。

夜長ノ気休メ

山の夜風は私の全身を撫で、爽やかな心地を与えてくれる。

また風鈴が夜風に晒されて、ちりんちりと鳴るなんてものもまさに夏の風物詩つてところね。

都会なんて、お天道様を阻む無数の大きなビルやら車の吐き出す屁もといガスやらで見事に夏の情景をぶち壊してくれる素敵なアイデアがあるのよ。

別に、都会は都会で良いところもあるけどね。スタンプカードを全部埋めればドリンクバーが無料になるファミレスがあったり、一万円分の買い物をすればもれなく現金一万円をゲッチュできるビッグチャンスな抽選がある大手デパートがあったり。でもそれってよく考えれば、当たったとしても吐いた一万円がまた還元されるだけだから、案外そう得でもないのよね。しかも、そういう抽選に限って、全然当たらなかったり。……まあ、そこは大人の事情つてやつなのだから、子供の私が口を出すのは無粋ね。

なーんて、妙に所帯じみたことを考えながら私は一人、縁側に座り、黄昏ていた。

何よ、私も一人つきりになりたいお年頃なのよ。それにこういう夜間の田舎の空気つてのも別に嫌いじゃないのよ。こうやって、冷たいそよ風を全身にあてていると、今日の良いことも、嫌なこともぜんぶ、土壌に埋めることができるのよ。そして、翌朝には掘り返すことになる、と。

……まったくもって意味のないことなのよ。我ながら意味不明な比喻表現をしたが、つまり私は過去を顧みない、未来という名の前を向き続ける、立派でたわいなナイスバディな肢体を有する美少女なのよ、ふぶん、どうよまいったか（九割方が出鱈目なのはお約束）。

……ふう、それにしても他人の家の枕つてのはどうも落ち着かないのよ。

今日の祖父母や叔母の態度だとか、何時も一緒に寝ているゲロツピーの抱き枕が不在だとか……そういう理由だけで落ち着かないわけではないの。……こら、今は聞き流しなさい、流せ。

単純に『落ち着かない』のだ。

無数の引越しを繰り返し、その度に新しい寢床で夜を過ごす。

他人様から見ればそれは慣れたものじゃあないか、とか言われるかもしれないけれど。

……何時まで経っても慣れないものよ、これは。

まあ、三日も経てばそんなことは考えなくなるのだけれど……初日はふと感じてしまうのよ。

こんなに同じことを繰り返して、いくつもいくつも点々と……一体私の本当の居場所はどこなのだとか。本当の私って、どこにあるのだとか。

「……………向日葵？」

……まったく、人がえくせれんとなのすたるじーに浸っている時に誰よ、邪魔する不心得者は。

声の発信源の方に振り向くと、ネズチュー（ゲロツピーの宿敵）のコスプレ……もとい、パジャマを着た秋桜が無表情で私の後ろに立っていた。ちなみにネズチューの容姿は、詳細に説明するとネズミの様にネズミでない……つまり、ネズミの皮を被ったネズミもどきのキャラクターである。えっ、説明になってない？ 詳しく知りたい人は『ゲロツピーとネズちゅーの猿蟹合戦』でググってみなさい。そして検索に費やした無駄な労力と時間にくよくよと後悔するがいわ。

「隣、座つてもいい？」

聞きながら私の横を座るあたり、この男の娘は人の話を半分しか聞かないタイプと見た。

しかし……この男の娘。何て綺麗な肌をしてるのよ。お風呂だと、あまり意識していなかったから気付かなかったけれど薄暗いところで見ると奴の首筋は何とも危険なブツなのよ。……クンクン、それに何よこの柑橘系の香りは。男の娘のくせに、香水とか生意気。……クンクン、本当に生意気よ。

「……向日葵、眠れないの？」

秋桜は心配そうな表情で私を見つめる。

……クンクン、クンクン。別に、クンクン、夢中になっていたとか、クンクン、じゃないのよ。

私はお風呂場では活用できなかった手帳を取り出し、思いを書き綴っていく。

……今度は防水仕様にでもしておこうかしら。

『別に。ただなんとなく、つれづれなるままに』

「ふふ、向日葵変わってる」

秋桜は僅かにほほ笑む。

……全般的に変わっているのはあんたの方よ。

ただ、私も人のことは言えないし、同じ穴のムジナとまでは言わないけれど、普通の人とは違うつところは自覚している。色んな意味でね。

『そういうあんたは何しに来たのよ……まさか、怖くて一人でトイ

レに行けなくなつたとか？』

「まさか、紫陽花じゃあるまいし。……ぜんぜん、怖くなんかないの」

そう言いながら、ぶるぶるっと震える秋桜。

こういうのって、人に指摘されると急に尿意が早まるのよ。

……まったく、素直に言えいいのに。私だって小さい頃はそういう経験があつたし、恥ずかしい思いもしたことがあるから理解はできるのよ。……いい？あくまで小さい頃の話よ？……だからあ、本当なんだってば。

『我慢なんかしないの、膀胱炎になるよ？ 私もトイレに着いて行つてあげるから』

「ち、ちがう……の。わ、私は……紫陽花の代わり……なの」

余計に意識してきたせいからか、秋桜は内股になり、お腹あたりを押さえはじめプルプル小動物のように震え始める。何が紫陽花の代わり、よ……放尿に代わりもクソもないのよ。

……
なんて、まさかおつきい方なのかしら。あらやだ、奥様お下品ザマ
ス。

「……いつ、ひ、向日葵は誤解してるのっ！！ すっごく誤解しています！！」

茹でダコのように顔を真っ赤にさせた秋桜は私に指さし、反論する。本当に分かりやすい男の娘ね。素直になれない男の娘には罰として、顔を熱したフライパン代わりにして目玉焼きを作つて、これ見よがしにむしゃむしゃ食べてやるわ、じゅるじゅるじゅる。

……。

なーんて、しょーもないことを考えている場合じゃないわね。

『隠さなくていいから、さっさとおしっこ行くわよ。ここであんたに失禁される方が洒落にならないのよ』

「う、うつゝ……し、仕方ない。ひ、向日葵がそう言うなら……行つてやるの」

秋桜は観念したのか、内股で両足をモジモジさせながら、少しずつゆつくりとトイレに向かつて歩き始める。何であんたは私の許可がないとトイレに行けない体質なのよ。

……ぷつ、ぷぷぷつ！た、体質う？

十九にもなって、しかも男の娘のくせに幽霊が怖くておトイレに行けないなんて、あゝおかしいったらありやしない。

「あつ、ああ！！　今、向日葵、私が幽霊が怖くてトイレに行けないのを馬鹿にした！　馬鹿にしたあ！！　そういう男のくせにとか差別することを世間ではせくしゃるはらすめんと言いますっ！！」

『カミングアウト乙』

「くう、ずるい、さすが向日葵ずるいの」

『私のどこがずるいのよ。ほら、無駄口叩いてないでここで待ってあげるからさっさと済ませるのよ』

「うう、わかった……。絶対、覗かないでね」

秋桜はそう呟き、トイレの中に入っていった。

……。

あんたのおトイレタイムを覗き見して、誰が得するのよ。

一部の腐女子ぐらいしか発狂しないのよ。

……。

ごめん、今の発言には問題がありました。あとで、何処かの誰かさんに訂正を要求するのよ。

何処かの誰かさんって誰だよって？知らないのよそんなの。事務所に問い合わせするといいわ。
だからといって、かたっぱしに色んな事務所に問い合わせないよーに。

「……あと、できれば耳を塞いで欲しいの。……音、聞かれたくない」

『いいからさつさとやれっ、このばかっつー！』

「花火……俺と犯^{ちゃ}っちゃおうぜ？」

数十分後。

放尿を完了した秋桜を引き連れて、再び縁側にやって来ると、庭先で大量の線香花火を両手で抱えた男が慈しむような瞳で私と秋桜に向かつてそう言った。……この男、そう言えば私が昼間に会った常夏グラサン野郎ね。

『……あんたってここの住人だったのね。てつきり、只の住所不定無職の痛い男だと思ったのよ』

「え、俺、そんな存外な扱い？ 向日葵にそんな男だと思われていただなんて……ショックだぜ」

『呼び捨てるな、こら』

「あ、向日葵に覚えてない？ 私と紫陽花のに……六花^{りっか}って名前」

「よろしくネ！ 向日葵ちゃん！」

『こら、人の話を聞け』

……覚えてないも何も。

こんなチャラ男、私の今までのバラ色の人生に一度も登場したことがないのよ。

大体、この六花とかいう男は私と昼間にあった時、知らない素振りをしたのよ……もし、秋桜の言葉が本当ならこの男も私のことを覚えてるってこと、つまりは秋桜の言葉は矛盾しているのよ。……それによくよく考えてみれば、秋桜や紫陽花の初めて出会ったときの反応もおかしいのよ。何で自己紹介するのよ……もし、私のことを知っていたのなら、その反応はとってもおかしいのよ。

……。

難しいことをあれこれと考えていても仕方がないのよ。

ところで、この六花とかいう男と双子姉妹(?)は兄妹のくせに全然似てないのよ。

「ま、ままつ、堅苦しい自己紹介なんか失くして、向日葵ちゃんの歓迎会の意味合いを込めて、今日はいっぱい花火を買い占めたんだ。楽しんでくれよ！ あつ、紫陽花と瑠羽、バケツに水汲んできてくれたね」

「く、ぐぐぐつ……が、我慢……本当はこんな浮浪者にアツシーみたいなことをやらされて黙っている私じゃない……！ けれど、これも全ては、にいにのブロマイド写真のため……！ が、我慢我慢……！！」

「にゅふう、瑠羽は六花様のような生粋のおちん・野郎は受け付けない体質ですので、六花様に向かってロケット花火を放つです。そしてえ、六花様を滅殺した暁には瑠羽のハーレムランドを形成してやるです」(良い子は絶対に真似しちゃダメです)

そして、水の入ったポリバケツを両手に持った紫陽花は不満たらた

らな顔して、のこのこと庭にやって来た。瑠羽は片手に何も入っていないバケツを振り回していた。……どうでもいいけれど、あの六花とかいう男は身内で嫌われているのかしら。

「そして、パパも華麗に登場！ 皆でパパをのけ者にするなんてずるいつー！」

そして、いつの間に華麗に沸いて出てきたのか、父が玩具花火を持つて庭先に登場した。

こら、お前は一体何歳なのよ。ほんと、自分のおやぢとは思えない程、自由奔放で変わり者でガキね。

今度から、『あーとねーちゃーおやぢ』って呼んでやるわ。

「向日葵い！？ 心の中でパパのこととっても蔑んでない！？」

<ぎゃーっすつー！！ る、瑠羽っ、あ、あたいに向かって、ねずみ花火を仕掛けるのはやめてえー！ ああうつ、火がつ、火があー！？ 俺、燃えてる！？ 俺、萌え萌え！？>

<きやはははっ、六花様、足元が真っ赤な太陽のよおに燃えてますよお、もつと燃えちゃえっ>

<瑠羽、そんな浮浪者にはロケット花火を使用するほうが殺傷能力があつていいぞ>（ 良い子は絶対にぜえっつたいに真似しちゃダメです）

<パパは一人寂しくコマ花火をしてやるぞう。わーはっはっはっは！>

周囲で早くも阿鼻叫喚の花火イベントが行われている最中、私はぼくっと突っ立っていた。

……こら、私の歓迎会なのに私抜きにいきなりおっ始めてんじゃないのよ。

これだから小市民的な彼奴等は……ぶつぶつぶつぶつ。

……。

別に、ちよつと皆に乗り遅れたから寂しいとかそんなんじゃないのよ。

自分だけ置いてけぼりにされたから、ちよつと涙ぐんでなんかいないのよ、ぐすつ。

「はい、向日葵」

こんな家、花火で燃えちまえばいいのよ、ぶつぶつぶつ……。

……と、思いつきり心の中で愚痴を唱えていると秋桜が私に線香花火を渡してきた。

『……こ、これを私に？』

「うん、一緒にやる？」

『……あ、ありがとう』

「……向日葵がお礼を言ったの」

私が秋桜にお礼を言うと、秋桜は心底驚いた様子で私を見つめていた。

……こら、その意外そうな表情は何よ。謝るだなんて、今どきのエテ公でもできるのよ、勿論私も。

そして、私はチャックマン……じゃなくてチャッカマンを用いて、線香花火の先端に火を近づけ、点火させた。

すると、線香花火はゆらゆらと灰色のガスを空に放出しながら、青

やら、赤やら、黄やら、その他諸々の色の火をぱちぱちと静かに放ち、土の地面にまき散らしていく。火薬の独特の匂いが鼻腔を充滿する。それは決して不快ではなく、夏らしさを演出してくれる調味料なのよ。

……小さな火を見ていると心が落ち着くとかいう話をよく耳にするけれど、その気持ちは分からないでもないのよ。……だからって、私は放火魔になるつもりはないのよ。

「……綺麗なの」

秋桜は私の隣でその幻想的な火の揺らめきを穏やかな表情でじっと見つめていた。

……。

――ねえ、あんた私と初めてこの町で会ったとき、何で、あんなこと……

そう、言葉を手帳に綴ろうとした時、パワーを失った線香花火は塵じりに真っ黒となって地に堕ちた。

私と、秋桜の、二つとも同時に。

「……ふふ、消えちゃった。もっかいやる？」

『……いいのよ、全力かかってきなさい』

かかってきなさいって、いったい私は何と戦っているのかよく分からないけれど、さっきのいいかけた言葉は飲み込み、再び花火を興じるのであった。

夜が更け月が雲にかかる頃、歓迎を兼ねたささやかな花火大会は幕を閉じ、皆、床についた。

こうして、私の初日の田舎町の生活は幕を閉じた。

【昭和五十三年八月二十九日】

サヨナラマデ、アト二日。

交錯スル嫉妬

I t's a continuation of nightmar
e i

I The second day

ふあ……あ……あ。

私は鏡の前で声のない欠伸を噛みしめる（だから起きたっていう実感を出すために心の中で噛みしめることにしているのよ）。あゝあゝ……ほんと、何て締めりのない顔をしているのよ私。目や二もついているし、口元に涎の跡は残っているし、唇は乾燥しているしで、こんな顔とてもじゃないけれど素敵でオサレな殿方の前ではお見せできないのよ。

……。う、うええ……殿方とか自分でも似合わないと思うような言葉を考
えたら胸焼けしてきたのよ。

とりあえず、朝のエチケツトは肝心なのよ。
朝のエチケツトに始まり、夜のエチケツトに終わるってね。夜のエチケツトとか決してエロいことではないのよ。

まず、歯を磨くのよ。

朝の歯磨きに始まり、夜の歯磨きに終わるってね。ちょっとしつこい？

健全な歯には健全な魂が宿るっていうし、いつも歯は白いペンキで塗りたくったかのようにピカピカにしておきたいのが女心なのよ。それに何かの番組で見たことがあるのだけれど、体の中で一番汚い場所は口内らしい。私は今までは、ごによごによごによ……が一番汚いと思っていたけれど。そこははっきり言えないのは察してください、としか言えないのよ。とにかく歯を洗うのよ。例え不潔戦士横着マンが邪魔したとしても、私は押し倒してでも歯をゴリゴリと磨いてやるわ。

歯ブラシ歯ブラシ……あ。

無い。洗面所には白のプラスチック製のコップの中にピンク色の歯ブラシが二本寄り添うように置いてあるだけだった。

……ペ、ペあるつく？

よくよく二本の歯ブラシをじっと眺めると、『あじ×こすも』と書かれた名前シールが持ち手に貼られてある。

これは何なのよ。もしかして、海水魚と某石油会社のタイアップかしら。はたまたカップリングなのかしら。

……そんなわけないじゃない。

「あ、ああー！？ お前っ、私とにいにお揃いの歯ブラシをじつと見つめて何してる！？」

呆然と洗面所で立っていると、バタバタと子供が走るような足音がした。

振り向くと、洗面所の表の廊下にピンクの手拭を首にかけた紫陽花が私をキッと睨みつけていた。

……何となく、この文字の意味が分かりたくないけれど分かったわ。

「……はっ、ま、まさか……！ お前っ、っ、使っつもりか……！
？ わ、私とにいにが愛用しているこの歯ブラシを唾液ででろでろに汚すつもりだなっ、この痴女！」

『あんた、何てことを言うのよ。歯を磨きたいのだけど、よく考えたら歯ブラシ用意していないことに気付いたのよ』

「そして、あわよくばにいにの使用済みの歯ブラシを……！」

『違っって言うてるだろ、こら。だいたい人が使っていた歯ブラシなんて気持ち悪くて使えないのよ』

「き、気持ち悪い！？ にいにが生んだ涎が気持ち悪いっていうのかビッチ！？ お、お前なんかトイレのたわしで歯磨きすればいいんだっ……ひっ、あひっ、いいいいいいいい……！」

『生意気なことを吐く口はこの口か、この口かっ』

私は壊れたオルゴールのように暴言を吐き続けるその生意気な口をギョツと抓ってやった。

よくもまあ、でろでろ涎やらビッチやらたわしやら着やせしないタイプ（↑言ってない）とか次から次へと暴言を吐けるわね。親の顔が見てみたいわ。……片親は既に見ているわね。

「く、くそう……唇がヒリヒリして痛い。わ、私をこんなにして、にいにに言いつけてやるう！」

『あんたはどこぞのボンボンかよ。それにしても、どうしようかしら……』

「お前、本当に歯ブラシないんだな。ちっ、仕方ない。これをお前に進呈してやる』

いっそのこと櫛を歯ブラシ代わりにしようかとか考えていると目の前のおちびさんが私に半透明の袋に入った歯ブラシセットを渡してきた。こ、これは……どこをどう見ても使い捨ての歯ブラシセット

なのよ。ど、どうしてこんなものをこの子が持っているのよ。しかし、それよりもこの生意気な小娘が親切にしてくれるなんて……。こんなことされたら素直に感謝したくなるじゃないの。普通に小娘とか言っちゃたけれどよく考えたらこの子私より一つ年上なのよ。ママ、とでも呼べばいいのかしら。

『え、この歯ブラシくれるのママ？』

「マ、ママってなんだ……。ばか、あげるわけない。これは交換条件だ。これを渡すことでお前はいにの半径百キロ以内に近づいてはいけない……。これが対等なギブアンドテイクだ！！」

『対等なギブアンドテイクになってないじゃない……。だいたいそれだと私は町から出て行かなきゃならないのよ。とにかくこの歯ブラシありがと、紫陽花』

「ふ、ふんっ、お前なんかに使われる歯ブラシはすつごく可哀想だな！！」

紫陽花は最後に憎まれ口を吐きつつ、洗面所から立ち去って行った。

……………。

しかし、あの子は一体何の用で洗面所に来たのかしら。

朝のエチケツトをしにきたのなら、ここを使うはずだし。……まさか、私に歯ブラシセツトを渡すため？……何だか違和感があるわね。もしかしたら秋桜の仕業なのかもしれない。しかし、人の好意を素直に受け取るのは乙女の礼儀なのよ。とにかく、歯をシャコシャコと磨くのよ。私は歯ブラシのブラシ部分に軽く水をかけ、歯磨き粉のチューブをにゅるっとブラシ部分につけ……。

……………。

チューブの口からにゅるっと黄土色の歯磨き粉が出てきた。

うわーい、カラフルな歯磨き粉で私の胸がドキドキワクワクするの、これをおでんや皿うどんにかけて食べるとおいしいの、舌も

ヒリヒリ私の心もヒリヒリ……って、こら、これは齒磨き粉じゃなくて練り辛子なのよ。あ、あのガキ……やっぱり、ロクなことしないのよ。仕方ない……今日は齒磨き粉無しで我慢するのよ。こうして私は一人、洗面所で泣く泣く朝のエチケツト活動に勤しむのであった。

本日は誠に日柄がよく、そしてお天道様も昨日以上にバリバリに働いております。

お天道様は外にいる動物に分け隔てなく、ガンガンに直射日光を与えてくれます。

私とちびっ子双子も例外ではありません。我々人間の水分は直射日光によって汗の形で引き抜かれ、脱水症になる可能性があります。つまり何が言いたいかというと……。

『あづい……のよ』

「ほら、向日葵。もうすぐで着くから頑張るの」

何故か私と双子の三人はクソ暑い中、獣道をひたすら歩き続けた。た。

どうしてこんな展開になったのか説明するのよ。

私が朝のエチケツト終えてから朝食時のこと。

紫陽花が『今日は川釣りをするの』とか不意に言い出したので、『いつてらっしゃい』と笑顔で返事しようとしたが、『向日葵は絶対』とかワケワカメな言葉で制止された。当然、私は不満たらたな表情をすると、『夏休みだから向日葵は何もすることがないの。町も

案内するよ?』と正論で返された。悔しいけれど、ぐうの音も出ないとはまさにこのことね……。

秋桜が行くということで、当然、紫陽花もついていくことになった。

六花とかいうホモは『町でナンパするから無理だお』とかふざけたことを言って、断った。

……何がナンパよ。あんたはおばはんやハードゲイにアタックしていればいいのよ。

そして、変態メイドの瑠羽は『瑠羽はメイ道を極めたいので無理ですう』とか言って、断った。

メイ道って何なのよ。まいど……思わず背筋が寒くなるほどのおやぢギャグを言ってしまったわ。

わけのわからないコメントだが、とにかく行きたくないという意味表示なのであろう。

そして私はその二人が拒む理由を身体で痛いほどヒシヒシと身に染みて感じていた。

……何だが、とてつもなくいやらしい表現になっちゃったけれど。

とにかく今日は昨日以上に体力を持って行かれるのだ。

町のはずれの獣道は当然歩きにくいし、蚊に刺されるし、得体のしれない虫と出会うし、無駄に汗をかくし、気持ち悪いしでいいところ一つもない。私が都会のもやしっ子でスタミナが無いからとか言われるとそれまでだけど、ハッキリ言ってこれは苦行だ。私は別に修行しに田舎町に来たのじゃないのよ。クーラーの効いた部屋でゴロゴロしながら昼ドラを見てキャツキャツウフフするのが性に合っているのよ。……あれ?それって都会に住んでいた頃と何も変わっていないじゃない。

「にいに……抱っこしてえええ」

「紫陽花? にいには子豚を背負えるほど力持ちじゃないの」

「にいいいい、何気に酷いことさうりと言ってるよおおお」

このうだるような暑さに音を上げたのか、紫陽花は秋桜におんぶを要求するが軽くあしらわれる。

流石にママにおんぶって歳じゃないし、私的にはザマーミ口って感じなのだけれど。

……………。

「あ、ああ……もうだめ。さようならこの世。こんにちはあの世」

『何、辞世の句みたいなこと呟いてんの。ほら、私の手に掴まって？　こんな所で倒れられちゃ、迷惑だし辛いのはあんただけじゃないのよ。秋桜ももうすぐって言ってるし、頑張るのよ』

「……お前の手、何かねたねたするぞ。気持ち悪い……」

『そ、それはお互い様なのよ。猛暑なのだから、手汗ぐらい出るのよ。だいたい、淑女に向かって気持ち悪いとは何事か』

「うん……わかった」

紫陽花は気持ち悪いと言いながらも私の手を頼りにまたゆっくりと歩く。

……何よ、妙にしおらしいわね。いや、この暑さのせいか。暑さのせいで脳内がオーバーヒートしているのね。

それなら、納得なのよ。そして、歩いていると背後から何かの視線を感じたので振り返ると、秋桜が無表情でありながらも細眼でジッと私を見つめていた。

「……………向日葵はいつの間にか紫陽花と仲良しになったの」

秋桜は私と目が合うとそう言って、私と紫陽花よりさっさと前に進んで行った。

……何なのよ一体、急に不機嫌になって。

心配しなくても別にあなたの妹は取らないのよ。男……じゃなくて、男の娘の嫉妬は見苦しいのよ。

数十分後。

痛い足を引きずるようにしてさらに歩くと、ようやく目的地の川原に到着した。

この辺りの川は清流で、地元の人にはよく魚が釣れる釣りスポットで有名……らしい。

らしいというのは、私が朝食時に秋桜から聞いた話だからだ。しかし、私にとって魚釣りとか正直どうでもいい……。今は足が痛くて、明日の筋肉痛を心配する方が最優先だ。

「わあー！ わあー！ 川だ、川だっ、川だあー！！」

紫陽花はというと、私が川原で尻もちついて横になっているのを尻目に無邪気に子供の様な笑顔で川の中ではしゃいでいた。……何よ、さつきは死にそんな表情で私に手を引かれていたくせに。これだから子供は……ぶつぶつぶつ。

……………。

よくよく考えたら、私は年齢的にあの子より子供なのよ。

ふん、悪かったわね。どうせ私は元氣のない都会のもやしっ子ですよーだ。ぶんぶん。

「あれまあ、あそこのお嬢さんは元氣良いのに、こちらのお嬢さんときたらモヤシみたいにへなへなしとるっぺねえ」

ぎよぎよぎよっ！？

私が仰向けになって真上に視線を向けると、麦わら帽子をかぶったよぼよぼのおぢさんが私の顔を覗き込んできた。

び、びつくりしたあ……い、いきなりこのおぢさんが話しかけてくるから心臓が口から飛び出そうになったのよ。仰向けになった瞬間、年寄りのどアップは勘弁してほしいのよ。

「あ、海蔵さん。お久しぶりなの」

「ん？ おーう、お嬢さんは……あれだろ？ 兵頭さん家の友子ちゃんだっぺ？」

「ちがうの」

「え？ そいじゃあ……波平さん家の多羅雄ちゃんだっぺ？」

「ちがうの」

「う？ え、えーっと……緒方さん家の恵子ちゃんだろっぺ！？」

「ちが……うの」

知り合いなのか、秋桜が麦わらのおぢさんに声を掛けるがおぢさんは知らない様子。

自分は覚えているのに、相手に忘れられるなんて切ないのよ……。ほら、秋桜なんて涙目になっているじゃない。

「あ、ああ！ あれかつ、日向さん家の秋桜ちゃんかあ！ 元気にしてたか？」

「おぢさん、絶対、一瞬、忘れてた……」

ようやく思い出したのか、麦わらのおぢさんは秋桜の頭を撫でながら陽気に笑っている。

どうして田舎のおぢさんは何かを誤魔化すとき、とりあず笑うのよ。笑っておけば、何でも済むとも思っているのだろうか。しかし、そんなことよりそろそろ紹介してほしいのよ。

「あ、おぢさん。そこでラッコのように横になっている子は私の親戚の日向向日葵なの。それで、あそこの川で気が狂ったかのようにはしゃいでいる元気な子は私の妹の紫陽花。覚えてる？」

「ああ、覚えているさあ。この白クマのように寝そべっている子はあれっぺ？ お前さんらとよく遊んでいた女の子だろう？ えらい美人さんになったなあ……。で、向こうにいるのが、ハハ、まだ色気より食い気って感じだっぺ」

麦わらのおぢさんはニツと笑ってそう言う。

……………。

ふ、ふん……私を褒めたって何も出ないのよ。

けれど、このおぢさんも私のことを知っているのか……例の如く、私は全然記憶にない。

記憶喪失ってわけではないはずなのだけど。そうか、記憶喪失なら記憶がなくなっているかどうかすら判断できないのよ。

…………… やっぱり、そう、なのかな。

「向日葵、このおぢさんは鮎釣り名人の海原海蔵かいばつみぞうさんなの」

「よろしくなあ、向日葵ちゃん。あれか、嬢ちゃんくらいの歳なら魚を釣るより、そこいらの男どもを釣る方が好きっぺなあ？ がははははっ」

よ、余計なお世話なのよ。何よ、その下品な笑い方は。

よし、手帳には『海蔵は笑い声がレイパーなおぢさん』とでも追記しておくのよ。

紫陽花はなかなかうまくこと魚をキャッチングできないことに痺れを切らしたのか、葉中のように河原に釣り竿を叩きつけたり、その場で地団駄を踏む。……そろそろやると頃だと思ったのよ。紫陽花の普段の言動や様子からして、予想のつく行動なのだから別にびっくりしない。私の隣にいる男の娘なんか意に介さず、黙々と鮎釣りをしているわ。

「……紫陽花うるさいの。そんな声を出したらお魚さんがみんな逃げちゃう」

秋桜は乱れる紫陽花の方を向かずに、淡々とそう呟く。
訂正、この男の娘切れているわね。キレテナーイ、の方じゃないのよ。

……………。

ツマランギャグを編み出して、ごめん。

恐らくは、秋桜もさつきから全然釣れないから紫陽花のように表情には出さずとも内心イライラしているのだろう。かくいう私もからつきしね。きつと、今の私の目は死んだ魚のような目をしているだろう。

「うつ、に、にににに……こ、こらっ！ おやぢっ、全然釣れないじゃないか！ どういうことだっ、このドブ川には本当にマグロやカンパチがいるのか！？」

「何を言ってるんだべ。この川はワシの心のよおに澄んだ透明の川だっぺ。それに、マグロやカンパチは海の生き物だあ」

「な、何が、ワシの心のよおに澄んだ透明の川、だっ！！ そんな難しいことばかり言って煙に巻いてるから、魚類は釣れても哺乳類は釣れないんだ！！ この独身おやぢ！！」

「がははははっ、こりゃあ紫陽花ちゃんに一本取られたっぺなあ。

おっ、またかかったかかった」

「うつ、うつゝー！！ あ、頭を撫でるなあ！！」

海蔵のおやぢは左手で紫陽花の頭を撫でながら、右手で釣竿を引き、鮎を釣り上げる。

……さすが鮎釣り名人と自称しているだけあって、その腕は伊達じゃないのよ。

海蔵の足元にあるバケツには既に開始から三十分ほどで鮎が十数匹たんまりと溜まっていた。

それに比べて、私と秋桜、それに紫陽花は……成果なし。

紫陽花じゃないけれど、私もこの場で生まれたての赤子のように発狂したくなってきたのよ。

「……………ちっ」

……………。

え、し、舌打ち？隣から聞こえてきたような……………。

「……………何？ 向日葵？」

『い、いえ……………何でも』

隣の男の娘を横目で見ると、能面のような表情で私の顔を見てきた。ぞ、ぞぞおゝゝ、コワッ。

まさかそこまでイライラしていたとは……………触らぬ男の娘に祟りなしってやつね。

しばらく放置プレイしておいた方が良さそうなのよ。し、しかし、やばいわね……………これで、先にさかなクンが釣れた日には……………やだ、何だか悪寒がしてきたのよ。オカン、助けて。

……………。

あによ、その白けた眼は？しょーもないこと考えるなって？

これは、アレよ。心を落ち着けるための一種のリラクゼーションなのよ。

「うううう、もう私は帰るっ!! 帰ってお昼寝するんだあ!!」

「……だめ」

「ひつ、に、にいに? ……で、でも」

「だめ。それに、今日釣る鮎がそのまま自分のお昼ご飯になります」

「え、えっ、え? に、にいに……?」

「逃がさない、絶対」

「ひ、ひいいい……!!!!」

「……………え?

な、何それ? そんな弱肉強食みたいなルールは聞いていないのよ。

な、何よ……ちよつと自分の腹の虫の居所が悪いからって、人に当たるのってそれは人としてどうなのよ。ちよつと、オシオキしてやるうかしら。そうね……おへその辺りを優しくサスサスと愛撫しながら、思いつきり泣かせて……。

「な、なら……あのおやぢに魚を分けてもらえば……」

「……『働かざる者食うべからず』。分かる? 紫陽花?」

「うっ……」

「つまり、私と紫陽花、それに向日葵もお魚さんが釣れるまで何も口にできません」

や、やっぱり私も含まれているのよ、こら。

「い、いや……」

「それが嫌なら、やるの」

「……………」

「紫陽花、返事」

「あつ……」

「紫陽花、へんじ？」

「はいい……！」

紫陽花は再び慌てて釣り竿を握り、あうあうと泣きながら釣りに励む。

……。

い、言えない。お腹なんか撫でられないし、文句も言える雰囲気じゃない。

もしかして、秋桜って意外とプライドが高くて負けず嫌いなのかも。

いかつこしい？つまりは誰かに自分のかつくいいところを見せたのかしら。

海蔵のおやぢ？……ありえない、このおやぢに自分のいいところを見せて誰が得するのよ。そんなのはおやぢ好きのメス犬に任せておけばいいのよ。

まあ普通に考えれば、自分の妹の紫陽花にカッコいいオトコノ……お兄ちゃんを見せたいのだろう。私は生涯一人っ子だから、そういう兄妹間の感情ってものがよく分らないのよ。

「がはははっ、お前さんら釣竿をニギニギしてがんばるっぺ。あつ、間違ってもワシの釣竿をニギニギしないでくれよお、がははははっ」

……。

秋桜、このおやぢを一発ぶん殴れば少しは気分が晴れるんじゃないかしら。

そして私は、はあと声にならないため息を吐いて、再び鮎釣りに集中するのであった。

お昼過ぎ。

ようやくギスギスとした空気が薄れ、お腹を満たしたところでお昼のおネンネ……とはいかず、せっかく河原に来たのだから水浴びでしようとか秋桜が提案したのだ。少し、伏し目がちで秋桜がそう言ったのだから、午前中のことを気にしているのだろうか。……まあ、私の見立てでは基本的にこの子は悪い子じゃないのよね。……妹はちよつと生意気なのよ。ちなみに、海蔵のおやぢは大漁で気分が良かったのか、鮎釣りが終わるとそのまま笑顔でレイパーな声を発しながら帰って行った。

「俺っちも混ぜて下さい」

「にゅふう、瑠羽も水浴びするのです」

そして、ちょうど三人で水浴びをしようとしたところに、一か所が不自然に膨らんだ海パン姿の六花、そして青と白のストライプ模様のビキニ姿の瑠羽がここぞとばかりにやってきた。

……こら、お前らはエスパーちゃんか。何でそんなタイミングよく堂々と現れるのよ。それにその格好からして、やる気ムンムンじゃなくてマンマンじゃないのよ。……まあ、確かに鮎釣りよりは数倍マシだけれども。

「よし、泳ぐぞっ!」

紫陽花も待つてましたと言わんばかりに、服をその場で放り投げ、水着姿になる。

……。

別に、その場で全裸になって着替えたって意味じゃないのよ。

服の下から水着を着てたつてこと。この子も随分と用意が良いわね。いや用意が良い、というよりも初めから水浴びをしようとしていたのかしら。

しかし……ス、スク水？胸元の白いゼッケンにひらがなで『あじさい』と書いてある。ぴちぴとちとしたスク水のおかげで残念な胸がより一層と強調されるのよ。もう、ロリの典型的な水着で何も言えないのよ。しかし……にやり、よしっ、やったっ、勝った！と私は心の中でほくそ笑む。

「……な、なんだっ、じつと見て……文句あるかパイパン！？」

紫陽花は私のニヤニヤ視線に目ざとく気付いたのか、少し頬を染め、荒々しくそう言う。

ふふん、今の私はあんたに何を言われても我慢できるのよ……だつて、ぷぷっ、お胸が、ぷぷっ、ぷぷぷぷっ、ぷぷぷのぷっ。

……。

やだ、今の私、我ながらキモチワルイ。

「向日葵？ 水着に着替えないの？」

秋桜も何時の間に着替えたのか、水着姿になっていた。

いや、紫陽花と同様、恐らくは下に水着をセツトアップしていたのだろう……。何よ、この子もさつきはちょっとギスギスしていたけれど楽しんでいるじゃない。性格は一見違ふようでも、やっぱり似ているわね、秋桜と紫陽花。

……。

しかし、その姿はナニ？

上は白のＴシャツに、下は花柄のパレオ付きの水着という秋桜の姿。

それにあいまって、女の子みたいに白くて壊れそうな華奢な身体、ぱっちりとした藍色の瞳、優しい聖母のような笑み、少し濡れた唇（リップ？）などなど……どう見ても女の子にしか見えない。下手したら女の子よりもオンナノコしてる。

……ドキドキ。

まずっ、な、何で私はこんなに胸がドキドキしてるのよ……。う、ううっ、目の前にいる彼奴は男の娘なのよっ、オ・ト・コ・ノ・コ！ドキドキしちゃいけないのよ、そうあれは未確認生命体……ほらっ、火星人とかE●みたいなもんだと思えばいいのよ。そ、そう、そうなのよ、あれは……。

「……っ、ひ、向日葵、血っ、鼻血出てるっ」

……へ？

秋桜に指摘されたので指で鼻の下あたりを拭くと、ザクロのような色をした液体が指先に付着した。

う、嘘……この私が？この、ネトラレ系の乙女ゲームでオス共のイケナイ行為を見ても何も感じなかった（精神的に）この私が？こ、これきしのことですコーフン？

「にへへへへえ、向日葵様あ、もしかして秋桜様のお姿を見て濡れちゃったとか？」

瑠羽は私と秋桜の様子を一部始終見ていたのか、私にティッシュを渡しながらニヤニヤとイヤラシイ笑みを浮かべる。こここ、こいつ……！

『ふ、ふっ、ふぢゃけるなあ！？こ、こ、こっ、この私がッ……コーフンなどっ！』

「その割には字がミミズみたいになってますよぉ、おやおや……
お顔も……にやにや」

くっ……。

今はこのセクハラ魔人に言葉で勝てる気がしないのよ。

ここから少し離れた方が良いのかもしれない。このままここでじつとしてたら私の心臓がもたないし、恐らくは紫陽花や六花も集ってくるかもしれない。……かくなる上は。

「あつ」

私は咄嗟に秋桜の手を取り、上流の方に小走りで向かった。

「あつ、あゝ！？ 向日葵様あ、敵前逃亡つてやつですかあゝ！？」

間抜けな声を上げるセクハラメイドの言葉を無視して、上へ上へと進んで行く。

……あれ？

何で、私、秋桜も連れて来ちゃったんだろ。

「はあはあ……」

大分、上流へ来たかしら。とにかくにも、奴らを撒くことができた。

……胸が大変ドキドキしてるのよ。

半分は走ったから、もう半分は……。

「……ひ、向日葵？」

私は少し顔が赤い秋桜の方を見る。

……きっと、私がいきなり走らせたからなのよ。うんうん、それなら納得納得。

……ヴァカ、私のばかばかばか。

何、関係の無い秋桜まで巻き込んでいるのよ。この逃亡劇は私の恥ずかしさゆえに招いたこと。

それを、まるで関係の無い秋桜に……。

……。

あ、あれ、あれあれ？な、何で私、こんな必死に秋桜をフォローしているのよ。

フォロー？べ、別に他意はない……のよ。

『……ごめん』

「……向日葵、何で謝るの？」

……。

謝る、何で私謝っているんだろ。冷静に考えてみれば、別にそこまで酷いことはしていない……のよ。これじゃあまるで私が秋桜に嫌われないようにフォローして……やめよ、何考えているのよ、私のばか、ばかばーか。

『……そうね、何だか変ね』

「でしょ？」

『うんうん』

「……ちよっと嬉しかったの」

『……え？』

「っ……うつん、何でもない」

秋桜はまた少し頬を染めて、私から少し視線を逸らす。

……こーら、その顔は何よ。

もしかしてまだ息を切らしてる？嘘だあ、もう呼吸も整っている。
だとすれば。

……。

こらこら、余計なことを考えるな私。

きっと秋桜は自分のふとした言動で赤くなりやすい体質なのよ。
地獄耳の私はちゃんど耳に残っているのよ。

『……ちよつと嬉しかったの』

……。

マテ、待て待て待て。

その言動は何よ。何で嬉しいのよ。あんたは私に走らされて悦ぶM
な子？えっちい？

走りフェチ？何ぞそれ。聞いたことがないのよ……そんな新種のフ
エチ、ていうかそれはフェチじゃないのよ。あーあー……何か色々
なことを考えて何かを誤魔化しているような気分ね。

もう考えるのはやめるのよ。めっ、考え過ぎは身体に毒です。

ぱしゃっ

わぶっ。

げぼっ、げぼっ……。

い、いきなり顔に冷たき水の感触が……。

「ほらほらっ、せっかくここまで来たんだし、二人で水浴びしよ」

秋桜はヒマワリのような爽やかな笑みを浮かべて、水をすくい上げる。

……私にはきつと、一生こんな笑顔は作れないだろう。別に父を恨んではないけれど、この子の方がよっぽど『向日葵』って名前が似合うような気がする。……やっぱり、嫌い、この名前。

「……向日葵？」

お、おっと、いけないいけない……。

何、しみりしているんだろ、私。目の前には秋桜がいるのに。

「……うんうん、黒の髪先から零れる滴……水も滴る良い女？ 向日葵は黒髪ロングだから白のワンピースがよく似合うの。きつと全国の私を含めた男の子はゾッコン。黒髪ロングの白ワンピースで真夏少女はオトコノコの夢」

『……ぷっ、何よそれ。それはもしかしてあんた流の告白？ それっ』

ぱしゃっ

「あっ……!!」

私はさっきのお返しに同じく水を秋桜にかけた。

水はちょうど、秋桜のＴシャツにかかったせいで透け透け透け番刑事。

……。

つまり、色んなものが透けているわけで。

何より、秋桜なりの気遣いがすごく嬉しくて。

「み、見ないで……」

秋桜は真っ赤になってさつと胸元を隠す。

……ポッチを隠しているのよ。だいたい、それは男の娘の見せる反応じゃないのよ。

まあ、私は顔に水がかかったただけだから堂々としているわけなのだけど。

仮に胸元にかかってても、堂々と見せびらかしてやるわ。

……え、それはただの痴女だって？うるさい、私はどうせえっちな女ですよーだ。

ぎゅっ。

おとつと。

冷えた身体の感触、見ると秋桜が私の身体をぎゅっと精一杯抱きしめていた。

でも華奢な身体でそこまで力があるわけもなく、その小さな精一杯は優しい抱擁に感じ取れた。

「……こうすれば、見えない」

……なるほど、わー、すごい。

じゃなくて、セクハラ。これは立派で偉大なセクハラです。

けれど、私は解こうともせず、むしろ秋桜の優しさが肌で伝わってきて、恥ずかしくて、自分もぎゅっと両手で抱きしめた。

「ふぁ……温かい……の」

……。

あー、もー、何なのよ。この可愛い生き物は。
できればずっと抱きしめたい、ヌイグルミみたい。部屋に飾って置

いておきたい。
部屋から一生逃がさない、それはある意味ホラーね。監禁になっちゃうのよ。

「……………んっ……………」

ふ、ふぐぐっ。

口を塞がれる。……………あ、足元を見てみると秋桜は背伸びしていた。
……………優しいキス、突然のキス、私にとってはファーストキス、でもそれは全然深いじゃなくて、いつまでもこうしたくて。

……………。

秋桜にとってはファーストキスじゃないのかな。

……………やだな、そんなこと考えるの。ふ、ふふ、いつから私の思考は少女思考になったのかしら。

おやぢ臭い感じが私の持ち味であり切れ味なのに。何だか、すごく調子が狂うのよ……………。

「……………ぶっ、は……………あ……………」

長い長いキスの後、秋桜は名残惜しむように私から離れた。

唇には秋桜の感触。さすがに舌はいれなかったけれど、これがキス……………魚じゃないのよ。

「……………向日葵、行こ？ 皆が待ってる」

秋桜は私の手を取り、元来た道、つまりは下流に向かって歩いていく。

そして、少し汗ばむ秋桜の手を感じて私は思った。

一目惚れ、二日目にして一目惚れ。

恋するのに、理由なんてなく。きつと様々あるのだけれど。そして、

きっかけは些細なことで。

――きつと、私はこの子に恋をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3038r/>

サヨナラノート

2011年11月13日19時34分発行